

花葉

2010
No.29



花葉会 発行

小さなことから協力を

JFTD・花キューピット協同組合 常任顧問

石川 君子

今年の夏はことのほか暑く、花の消費も芳しくなかった。花産業関係者は、それぞれに努力していることと思うが、こんな時はどうしたらよいのだろうか。

花の小売業者の団体の仕事をして、ようやく2年半になる。一口に小売と言っても、その売り方は多様で、ウエディングや葬儀、いけばな花材、法人向け、通信配達や店頭売りなど、かなり専門化していて、全体像を捉えるのは難しい。また、それぞれの関心ごとや利害も異なる。種苗業者や生産者、市場などはどうなのであろうか。

花の消費を伸ばすためには、個々の小売店の経営戦略やサービスの向上はもちろん重要である。しかし、それだけでは、花の消費は伸びそうもない。花業界は消費者の信頼を得ているのだろうか。車や電気製品や化粧品は、世界のトップブランドとなった。食料品も、BSEの発生を契機として、トレーサビリティの取り組みなど、消費者の信頼を得るための努力をしている。花も新鮮で魅力的な商品を提供できるよう、業界あげ

て取り組む時ではないだろうか。花産業関係者は、他産業や他国と比較して、消費者の信頼を得るための努力や情報公開をしているだろうか。生鮮品の品質管理に気を配ることは、産業の基本である。しかし、中小零細企業の集合である花産業が、川上から川下まで、ひとつの目標に向けて協力することは現状ではなかなか難しい。

花産業関係者が集まって、消費者の目線に立って、花産業のグランドデザインを描くことはできないだろうか。そして、そのデザインに沿って、何か小さなことから協力の輪を広げていくことはできないのだろうか。

いいえ、もっと簡単に、何か協力してやって見ませんか。自分の分野や仲間の範囲を超えて手を繋いで何かやってみませんか。語り合い、お互いの経験や知識を交換し、罵り合い、何かを生み出してみようではありませんか。

<p>花葉</p> <p>2010 NO.29</p> <p>目次</p> <p>禁無断転載</p>	私の提案 小さなことから協力を……………	石川 君子 (1)
	青いバラの誕生を紐解く……………	松原 紀嘉 (2)
	表紙解説 チューリップのふるさと イラン……………	上田 善弘 (5)
	A君と共に、「花が持つ力」を考える……………	伊藤 泰史 (6)
	ホトトギスとの出会い……………	中野 優 (10)
	イラン探訪記 バラを訪ねて……………	上田 善弘 (14)
	ヒマラヤのテント植物とセーター植物を訪ねて……………	熱田 健 (18)
	自叙伝抜粋 夜来香と桜草……………	鳥居 恒夫 (21)
	JR 館山駅前花壇の設計を引き受けて……………	林 角郎 (26)
	走って稼ぐ、それが俺ンち流。……………	黒澤 達也 (28)
	信頼されるユリ農家を目指して……………	土居 智博 (32)
	トピックス 吉池貞蔵氏 バラコンテストで金賞受賞……………	上田 善弘 (40)
	100年前の松戸と園芸学部……………	横井 政人 (41)
	花葉会が千葉大学に八重桜の苗木を寄贈した経緯……………	安藤 敏夫 (44)
	追悼 飯塚先生との思い出……………	横井政人・羽毛田智明 (47)
	2010年花葉サマーセミナーレポート……………	久保田芳久 (48)
花卉園芸学研究室レポート 変わるもの、変わらないもの……………	西岡恵理華 (52)	
園芸別科花組レポート 思いが広がる「1000属検定」……………	後閑 早苗 (53)	
花葉会総会 (54) 花葉会賞受賞者紹介 (58) 花葉会賞受賞記念講演 (61)		
花葉会会則・役員名簿 (57) 会員名簿の追加と訂正 (62)		

青いバラの誕生を紐解く

千葉大学 環境健康フィールド科学センター

松原紀嘉

不可能の代名詞「青いバラ」誕生まで

2009年11月3日にサントリーフラワーズ(株)から青いバラの販売が開始された。自然界では決して存在することの無かった青色のバラは遺伝子組換え技術を用いて創り出された。開発から販売までの期間にはほぼ20年を要している。本稿では、その20年の歳月を要した研究での試行錯誤、青いバラ誕生までの研究の一部を2007年にKatsumotoらによって発表された論文(Engineering of the Rose Flavonoid Biosynthetic Pathway Successfully Generated Blue-Hued Flowers Accumulating Delphinidin, *Plant Cell Physiol.*, 48, 1589-1600)を参考に紹介する。

まず、花の色が青になるための基礎情報について触れよう。花が青色になるには当然、青色の色素が必要となる。様々な植物の花色を構成している色素は主にフラボノール、カロテノイド、ベタレインなどがあるが、青色となるためにはフラボノールに属するアントシアニンが必要である。アントシアニンは赤～ピンク、そして紫～青など様々な色合いを示す色素であるが、その基本的な色合いはアントシアニンに結合する糖や有機酸の種類や数にはあまり関係がなく、アントシアニンの基本骨格のB環に結合している水酸基(-OH)とメトキシ基(-OCH₃)の数で変化することが一般的である(第1図)。水酸基の数が多くなればなるほど、赤色から青色を帯びようになり、これがメトキシ基に換わると赤味を帯びようになる。特に青色色素と呼ばれているのは、アントシアニンの基本骨格のB環の3カ所に水酸基が結合したデルフィニジンと呼ばれる色素である。つまり、青いバラを創るためにはデルフィニジンを花に蓄積する必要がある。バラの品種の中には1957年に作られた藤色系品種‘スターリングシルバー’を祖先として、‘マダムビオレ’、‘ラバンデ’、‘ブルームーン’、‘青龍’などの藤系品種が生みだされている。しかしながら、その藤色を構成している色素は、

赤色色素のシアニジン系アントシアニンとフラボノールのみであり、青色色素をもっていない。つまり、バラは青色色素(デルフィニジン)を創り出す能力を持っておらず、これを解決しないことには青いバラを創り出すことができないのである。バラで青い色素デルフィニジンを創り出すためには、青色の鍵遺伝子であるフラボノイド3',5'水酸化酵素遺伝子(*F3'5'H*遺伝子)を導入しなければならない(図1)。そこで、ペチュニア、リンドウ、チョウマメ、パンジーから取り出した青色遺伝子*F3'5'H*をバラに導入したところ、パンジーの遺伝子だけがバラでデルフィニジンを創り出すことに成功した。さらに、青い花であるリンドウ、キキョウ、シネリリアでは、芳香族アシル基が結合したアシル化アントシアニンを蓄積する特徴があり、アントシアニンをアシル化することによってより花の青味が増すことが知られている。そこで、トレニア由来のアシル基転移酵素遺伝子(*5AT*)をパンジーの*F3'5'H*遺伝子と同時にバラに導入した。この組換え体ではアシル化による青色発色への効果はみられなかったが、デルフィニジンは花卉で合成されていた。また、このうちの数系統では、交雑育種では得られない新しい青味のある

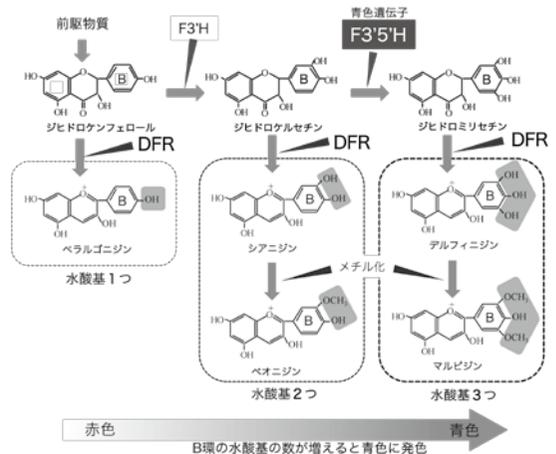


図1 アントシアニン生成経路

バラが得られた。この遺伝子組換え系統のうちから2個体の組換えバラが選抜され、温室と圃場での試験栽培が行われた。今現在の青いバラ 'APPLAUSE™' は、このうちの1系統から選抜されて市販されたものであるが、遺伝子組換え植物を販売するには大きな関門がある。それは2000年に国連で採択された「カルタヘナ議定書」に基づく「カルタヘナ法」である。この法律を通過するためには、この遺伝子組換えバラが生物多様性へ悪影響を及ぼさないこと、つまり環境中にこの組換え体の遺伝子が飛散しないことを証明しなければならない。幸いなことに、この遺伝子組換えバラを調べると花弁の表皮細胞には組換え遺伝子が存在しているのに、花粉には存在していないという現象が生じていた。このため生態系に影響が無いと判断されて販売に至ることができた。

更なる青いバラを求めて

青いバラとして最新の技術からついに販売まで達することができたが、その創り出された「青色」はまだ色鮮やかな本当の青色とはいえない。そのため、その後もより鮮やかな青色を生み出すための研究が続けられている。これまでの研究から青味の程度やデルフィニジンの蓄積程度は遺伝子導入に使われるバラ自体の性質に大きく影響することがわかってきた。これは、花弁のpHが低いバラではデルフィニジンが蓄積してもpHの影響を受けて深紅色の花になるという問題や、*F3'5'H*を導入しても花弁に含まれるアントシアニンがすべてデルフィニジンにならず、シアニジンも含まれるという問題として浮び上がっていた。つまり、より青い花を作るためにはpHの高い系統でシアニジンの蓄積を抑制して、デルフィニジンのみが蓄積するようにしなければならない。そこで次に鍵となったのがDFR（ジヒドロフラボノール4-還元酵素）遺伝子である（図1）。DFRは無色のジヒドロケンフェロール、ジヒドロケルセチン、それからジヒドロミリセチンの3種類のジヒドロフラボノールからアントシアニンへの合成を進める酵素である（図1）。このDFRは植物種によっては特定のジヒドロフラボノールしか基質として反応することができない基質特異性という性質を持っている場合がある。例えばペチュニアのDFRはジヒドロケンフェロールを基質として反応することができないため、ペチュニアの花にはジヒドロケンフェロールから合成されるペラルゴニジンが含まれていない。バラのDFRはデルフィニジンを合成するためのジヒドロミリセチンを基質とすることもできたが、その特異

性は低く、同時にジヒドロケンフェロールやジヒドロケルセチンも基質としてしまうため、ペラルゴニジンやシアニジンが同時に蓄積していた。そこで、ジヒドロケンフェロールを基質として反応せず、ジヒドロミリセチンとの反応性がよいダッチアイリスのDFR遺伝子をパンジーの*F3'5'H*遺伝子と同時に藤色バラ 'ラバンデ' に導入した。この2つの遺伝子を導入した系統では、*F3'5'H*遺伝子のみを導入した系統に比べて、デルフィニジン含量が増加したが、まだシアニジンが合成されてしまい青の花にはならなかった（図2）。ダッチアイリスのDFRがデルフィニジンの合成に効果的であることがわかったが、合成されたシアニジンにはバラ自身も持っているDFRが関与している可能性があった。そのため、バラのDFR遺伝子を機能させないようにしなければならなかった。そこで次に行った遺伝子操作がRNAi法という特定の遺伝子の機能を破壊する方法である。つまり、このRNAi法でバラのDFR機能を取り除いてデルフィニジンだけを蓄積するように遺伝子操作をしたのである。ダッチアイリスのDFR遺伝子とパンジーの*F3'5'H*遺伝子、それからバラのDFR遺伝子のRNAiの3種類の遺伝子を同時にバラに導入して、花の色素成分を分析したところ、ほとんどのアントシアニンがデルフィニジンで構成されるようになり、これまでの遺伝子組換えバラの中で最も青い色合いとなった（図2）。さらにこの遺伝子組換え系統を交配親として使った場合、後代でデルフィニジンの蓄積が優性形質として遺伝するため、青花品種の作出以外でもデルフィニジンの蓄積を利用することができ、バラの色彩の幅を広げることも可能になると考えられている。

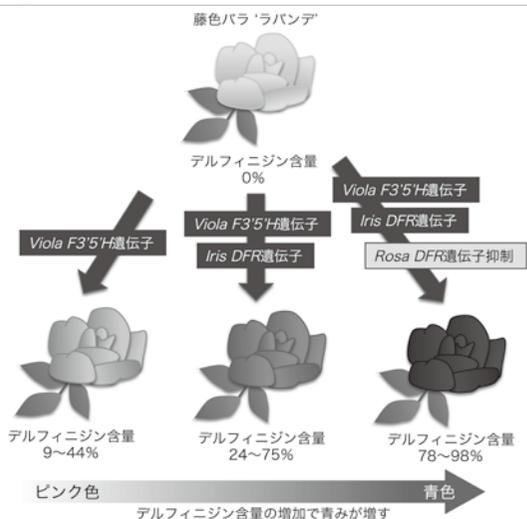


図2 遺伝子組換えに用いた導入遺伝子とデルフィニジン含量の関係

デルフィニジン＝青色…とは限らない

ここまで、青色＝デルフィニジンという考え方で話を進めてきたが、そうならないケースも多々ある。例えば、アジサイの萼片の色合いについてだが、赤色の萼片は青色の萼片と同じ青色色素のデルフィニジンで構成されている。アジサイの赤色と青色の発色の違いにはアルミニウムが関与していることは良く知られているが、アジサイの青色はアルミニウムの存在だけでなく、有機酸との共存によるコピグメントも青色化の一助となっている。さらに、赤と青の液胞内 pH は 0.5 程度の差があり、この微少の pH の差だけで赤になったり青になったりと発色に大きく影響する (Yoshida *et al.*, 2003)。また、紫色のチューリップ ‘紫水晶’ は花の内側の底の部分だけが青色となり、他は紫色となる。この紫色と青色の色素はともにデルフィニジンであるが、紫か青かの発色を決定しているのは、色素成分でもなく、コピグメントでもなく、pH でもない、鉄イオンだということが報告されている (Shoji *et al.*, 2007)。青色部位は紫色部位と比較して鉄イオン濃度だけ約 25 倍多く含まれており、この青色化には鉄イオンが必須であることが証明されている。つまり、青色色素であるデルフィニジンが合成されて蓄積されれば、花の色が必ず青色になるとは限らないのである。デルフィニジン色素が蓄積された上でさらに様々な要因によって複雑に制御されることによって、青色の発色が生み出されるのである。

では逆に、主要色素がデルフィニジンでなければ青い花にならないのかというと、そうとも限らない。深い青色の花を咲かせるヤグルマギクの花色素は、赤色色素のシアニジンが主体である。この赤色色素がなぜ青色に発色するかというと、シアニジンだけでなくフラボンや鉄、マグネシウム、カルシウムなどの金属と複合体 (金属錯体) を形成することによって、赤色の色素でも鮮やかな青色に発色することができる (Shiono *et al.*, 2005)。また、青い花として代表的なヒマラヤの青いケシ、メコノプシスも見た目に反して赤色色素のシアニジンを主要色素としている。こちらは無色のフラボノールが同時に蓄積していて、アントシアニンと共存すること (コピグメント) によって青色化している (Yoshida *et al.*, 2006)。また、澄んだ空の色のような鮮やかな青色の花をさかせる西洋アサガオ ‘ヘブリーブルー’ の色素も赤色色素のシアニジン系アントシアニン (ペオニジン) が基本骨格となっている。この西洋アサガオは蕾の段階ではまだ赤紫色をしているが、

開花とともに鮮やかな青色となる。この開花の過程で青色化へ進むメカニズムは液胞内 pH が関わっており、蕾段階での pH が 6.6 に対して開花後は 7.7 へと上昇し、液胞内がアルカリ化することによって青色の発色となる (Yoshida *et al.*, 2005)。このように、青色色素のデルフィニジンを合成しない場合でも、青い花ができるのである。

販売まで結びついた青いバラは、まだ完全に青と呼べる色合いではない。それは完全な青い花が作られる過程は上述の様に複数の要因が関わるが必要であり、より完全な青いバラを創り出すためにはバラに合う青色化するための因子を探求しなければならない。その一方で「青」という表現は澄んだ空のような色を指すこともあれば、深い色合いの藍色や透き通った海のような色もあり、一概に「青」と表現するのはとても難しいことである。また、「青」の色が多様であるように、人の好みの「青」も各々の感性で異なってくるため、本当に求められている「青い」花を創り出す研究というのはまだまだ尽きないだろう。

【参考文献】

1. Katsumoto, Y. *et al.*: Engineering of the Rose Flavonoid Biosynthetic Pathway Successfully Generated Blue-Hued Flowers Accumulating Delphinidin, *Plant Cell Physiol.*, 48, 1589-1600 (2007)
2. Tanaka, Y. *et al.*: Recent Progress of Flower Colour Modification by Biotechnology, *Int. J. Mol. Sci.*, 10, 5350-5369 (2009)
3. Yoshida, K. *et al.*: Sepal Color Variation of *Hydrangea macrophylla* and Vacuolar pH Measured with a Proton-Selective Microelectrode, *Plant Cell Physiol.*, 44, 262-268 (2003)
4. Shoji, K. *et al.*: Perianth Bottom-Specific Blue Color Development in Tulip cv. Murasakizuisho Requires Ferric Ions, *Plant Cell Physiol.*, 48, 243-251 (2007)
5. Shiono, M. *et al.*: Structure of the Blue Cornflower Pigment, *Nature*, 436, 791 (2005)
6. Yoshida, K. *et al.*: Ferric Ions Involved in the Flower Color Development of the Himalayan Blue Poppy, *Meconopsis grandis*, *Phytochemistry*, 67, 992-998 (2006)
7. Yoshida, K. *et al.*: The Involvement of Tonoplast Proton Pumps and Na⁺ (K⁺) /H⁺ Exchangers in the Change of Petal Color During Flower Opening of Morning Glory, *Ipomoea tricolor* cv. Heavenly Blue, *Plant Cell Physiol.*, 46, 407-415 (2005)
8. Honda, T. and Saito, N.: Recent Progress in the Chemistry of Polyacylated Anthocyanins as Flower Color Pigments, *Heterocycles*, 56, 633-692 (2002)

チューリップのふるさと イラン

岐阜県立国際園芸アカデミー

上 田 善 弘

イランの国花はバラである。バラが香料用として栽培されたのはイランが最も古く、バラ栽培の原点を探るべく、イランを訪問した（詳細は本誌別稿を参照）。そんなイランであるが、意外と知られていないのは、チューリップの国でもあることだ。実は、イランの国旗の真ん中に描かれているのはチューリップの花である。そのチューリップは4つの剣と三日月を用いて描かれており、イスラーム革命で亡くなった殉教者を象徴しているという。

写真のチューリップは、テヘランから東約1000 kmのマシャドにある大学の野外植物調査に同行した際、5月2日に撮影したものである。マシャドから西に約300 km、北イランの山岳部でこのチューリップに出逢った。北イランからコーカサスにかけて分布する、チューリップの野生種、チューリップ・モンタナ (*Tulipa montana* = *T. wilsoniana*) である。礫の多い乾いた山の斜面に、群生せず広く散在し点々と咲いていた。まさに花の最盛期で、その赤い色がたいへん印象的であった。標高は2,000mぐらいで、周辺には高木はなくまばらに低木が生え、エレムス属、アイリス属、アリウム属などの球根植物を見ることができた。

栽培種には *T. gesneriana* の学名がつけられているが、その起源ははっきり分かっていない。トルコやイラン（ペルシャ）ではかなり長い栽培の歴史があり、ヨーロッパでのチューリップの栽培は、1554年神聖ローマ

帝国の外交官としてオスマン帝国シュレーマン大帝のもとに派遣された Ogier de Busbecq が、トルコでの栽培状況をヨーロッパに伝え、種子や球根を送った時に始まるとされている。ヨーロッパに導入された当初から、花形や花色が変化に富んでいたことからトルコやイランで栽培の過程で表れた変わりものを選んできたものと思われる。筒井（1981）はガーデンチューリップの発達史において、ヨーロッパ伝来以前の変異が蓄積された時代をアラブ時代（*gesneriana* 形成期）と称している。Mabberley（2008）の Plant-book に、イランでは13世紀以来チューリップが栽培されていて、花色が複色の品種が存在したとある。萩屋（1970）が、*T. gesneriana* の多系統の品種と野生種との交雑親和性を調査しているが、*T. montana* を用いていない。

このように *T. montana* の栽培種への関わりは不明であるが、本種はイラン北西部のトルコに近いところまで分布があるので、トルコにも自生すると思われる。そのあまりにも艶やかな赤い花色とすっと伸びる花茎から、私には栽培チューリップにも何か関わりがあっても不思議ではないような気がしてならない。

【参考文献】

- ・ 天野正之（1989）チューリップ、植物遺伝資源集成、講談社 第3巻、1067-1071
- ・ 萩屋薫（1970）チューリップの種間雑種による育種、育種学最近の進歩、第12集、71-81
- ・ 筒井澄（1981）チューリップ属における栽培種の起原とその育種、育種学最近の進歩、第23集、68-77
- ・ Mabberley, D.J.(2008) Mabberley's Plant-book, 3rd ed. Cambridge University Press



チューリップの自生する地域の風景



マシャド大学植物科学センター所蔵の *Tulipa montana* の錯葉標本

A君と共に、「花が持つ力」を考える

日本認定心理士会会員 全日本博物館学会会員 Z会進学教室講師

伊藤 泰史

A君は、大学を出て以来今日まで、大学で学んだ専門とは少し距離を置いた仕事で、生計を立てています。大学では園芸学を学び、専門家としての活躍を期待されたA君でしたが、諸般の事情から、卒業後はサービス業の世界に身を投じました。常に「お客様第一」の姿勢を要求される毎日の中で、心身に消耗してしまった時、A君の心に必ず思い浮かぶのは、大学受験生の頃にラジオ講座の講師が紹介してくれた石川啄木の短歌です。

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
花を買ひ来て妻としたしむ

文学に素晴らしい才能を持つ啄木が、現実の生活では様々な苦難に遭遇し、辛酸をなめる中で創作したこの短歌を思い出すと、A君は「自分も、花によって慰められて、明日への元気を貰おう」という気持ちになり、実際、元気を取り戻す、ということを繰り返してきました。

でも、「花によって慰められる」ということを職場の同僚に語ったりすると、あまり好意的ではない反応を示す人に出会うことも、少なくありません。後ろ向きな姿勢、消極的、ネクラ、年寄りじみている、などという言葉が返されて、「ああ、この人には語らなければよかった」という思いを抱くことも、一度や二度ではありませんでした。それでも、A君は、学生時代に集団検診で見つかった病気の治療のために大学病院に入院していた時のことを思い出すと、「花が持つ力」を、どうしても、もっと前向きで積極的で明るいものとして、捉えたいのです。入院中、今後への不安や寂しさから減入りがちな気分を、友人たちが見舞いに持ってきてくれた花や、時には、お茶筒の外側に描かれた花（確か、キキョウかリンドウでした）の絵が、慰めてくれ、救ってくれた、と、A君は今でも感謝しています。

ストレスを花で解消

そんな折、A君は、大学時代のサークル活動の先輩で、大学で心理学を修めた後、現在に至るまで、カウンセリングなどの仕事を続けているBさんと、数年ぶりに再会する機会があり、日頃の花への思いなどを、心の問題に詳しいBさんに聞いてもらうことにしました。Bさんは、A君とは専門こそ違いますが、A君の花や園芸を愛する心の優しさをよく理解し評価してくれている、A君にとっては貴重な知己です。以下に、この時のA君とBさんの会話の一部を再現します。

A君：Bさんもよくご存じのように、僕は、色々なストレスに悩まされた時に、石川啄木の短歌のように、「花を買ひきて～したしむ」ようにしています。もちろん、普段からも、細々ながら、花を育てていますが。これって、僕にとっては当たり前の、とてもいいストレス解消法に思えるのですが、あまり前向きな方法ではない、とか、「大の男がやることか」などと言う人もいて、密かに傷ついたり後ろめたさを感じたりすることがあります。Bさんのような心理学の専門家から見ても、やっぱり僕って、「少し変」ですか？

Bさん：ストレスの解消法なんていうのは十人十色で、誰かに嫌な思いをさせたり危害を加えたり、とか、自分自身の体に悪いことを続けたり、といったことが無ければ、その方法について誰かにとやかく言われるのは、おかしいよね。僕は、A君の方法は、A君にとってとてもいい方法だと思うよ。「命と触れ合う」という点にも、他の方法にはなかなか見られない可能性を感じるよ。

A君：ありがとうございます。Bさんの今の言葉を聞いて、心の中のモヤモヤが、少し晴れたように思えます。

Bさん：晴れたのは、「少し」なの？ まだ何か、心の中でくすぶっているのかな？

A君：実は、そうなんです。僕に限らず、今の世の

中って、ストレスに悩まされている人が結構多いじゃないですか。僕の職場の同僚にも、体の具合が悪くなっても、お医者さんに隠れてお酒を飲み続けている人がいて、傍らで見ている方がハラハラしているんですけど、ああいう人にとっては、お酒を飲むことがストレス解消法なんだろうなって思うんです。でも、やっぱり、ストレス解消で体を悪くするのは、痛々しい気がします。僕のように花を眺めたり育てたりすることを、ほかの人に無理に勧めようとは思いませんけど、ストレスとの付き合い方について、自分のためにも仲間のためにも、もっとよく知りたいな、と思うんです。

Bさん：いいことを言ってくれるね、君は。君のような気持ちの持ち主がもっと増えれば、あちこちの職場も、だいぶ働きやすいものに変わるだろうね。今、A君が言っていた「ストレスとの付き合い方」は、心理学では「コーピング」といって、その大切さが、最近では広く認められつつあるんだ。学会誌や専門の事典にも扱われるようになったし、一般向けの本にも登場するようになってきたよ。A君は昔から「調べること」が得意だから、図書館やインターネットで、ぜひ調べてごらん。色々なことがわかると思うよ。

A君：わかりました。早速、パソコンで検索してみます。今度の休日には、図書館にも行ってみようと思います。今日はどうもありがとうございました。

Bさん：調べてみて、何か疑問点が見つかったり、わかりにくい言葉があったりしたら、気軽に僕に尋ねてくれていいからね。ストレスについて調べることが、かえってA君のストレスになっては、何にもならないからね。

「コーピング」について

以上のような会話が交わされた後、A君は「コーピング」(coping)について調べて、多くのことがわかりました。英語の動詞 cope に由来する「コーピング」は、以前は「対処」と和訳されていたのが、最近では「対処努力」と訳されるようになり、結果の良否にかかわ

らず、ストレスに対処しようとする積極的な姿勢や行動として見られるようになってきた、ということを知って、A君は何だか自分たちが励まされているような気がして、嬉しくなりました。

「コーピング」には、大きく分けて、ストレスの原因そのものを取り除こうとする「問題焦点型コーピング」と、自分の見方や気持ちを意識的に変えようとする「情動焦点型コーピング」との2つのタイプがあり、その身近な例として、重要な試験を受ける前に不安に陥っている受験生が、ノートや参考書を読み直してみるのには「問題焦点型」で、自分の気持ちを落ち着かせようとしてお守りをギュッと握りしめるのは「情動焦点型」だ、とありました。まあ、問題そのものが解決に向かえばストレスは軽くなってくるだろうけど、それが難しい時には、自分の側の捉え方や心の在り方を変えていく必要があるんだろうな、と、A君なりに理解しました。

学んだばかりの2つのタイプのコーピングのうち、自分にとっての「花」は、一体、どちらなのだろう、と考えてみると、サービス業でヘトヘトになった自分が花を見たり育てたりしても、ストレスの原因そのものが無くなる訳ではないけれど、花は僕の心を元気にしてくれるし、「明日も頑張ろう」という気持ちが自然に湧いてくるんだから、これは「情動焦点型」の方だな、と理解しました。

お酒をたくさん飲み続けると体を悪くするし、習慣化してしまうと、なかなかやめられなくなるみたいだけど、花にはそういう困った問題も見当たらないし、いいことばかりだ、と、A君は「花の愛好家」としての自分に、ささやかな自信さえ持てるような気がしてきました。そこで、ここまでの経過や現在の自分の気持ちを報告しようと思い、再びBさんに会うことにしました。以下に、この時のA君とBさんの会話の一部を再現します。

Bさん：A君の心のモヤモヤもだいぶ晴れたみたいで、表情もスッキリとしてきたね。まずは、おめでとう。



春を告げるラッパズイセン



初夏のハナショウブ



夏の庭を彩るアサガオ



秋を告げるキキョウ

ところで、コーピングに関する言葉に「コーピングスキル」(coping skill) というのがあって、これは「コーピングをする技術」という意味で、花を見たり育てたりすることは、A君にとっては重要なコーピングスキルなんだろうね。

A君: 「コーピングスキル」ですか? やはり、ストレスに見舞われがちな今の時代を生きていく上では、重要な「生きるための技術」ということになるんでしょうね。ところで、自分が使うコーピングスキルは、いつも使う1つか2つがあれば、それで十分なのですか?

Bさん: A君はいい所を突いてくるね。サービス業で苦勞しているA君の場合で考えてみると、サービスの内容に工夫を加えたり、お客さんをよく観察して心理状態を推測し、それをサービスに活かす、という「問題焦点型」のコーピングだって、大いに活用して欲しいし、「問題焦点型」と「情動焦点型」のコーピングは、両方をうまく組み合わせて使うのが、一番賢いやり方だと思うよ。例えば、心身症は代表的なストレス反応だけれど、こういう反応を軽いものにするには、やはり、ストレスの源を弱めていく「問題焦点型」のコーピングの方が、「情動焦点型」よりも効果が大きい、ということが報告されているね。

A君: そうでしたか。じゃあ、僕のコーピングのことを「消極的だ」と言った人の言葉にも、一理はあるのですね。

Bさん: 確かにね。でも、その人の言い方がキツ過ぎれば、やはり、言われたA君は傷つくよね。いずれにしても、コーピングのレパートリーは豊富であればそれに越したことはないし、更に、その人が置かれた状況に応じて、適切なコーピングを使い分ける力や柔軟性の大切さについても、最近では注目されるようになってきているんだ。結局、一番大切なのは、A君のような真面目で前向きな人一人ひとりが、ストレスの原因となる「ストレス」の多い世の中につぶされなくて、生き生きと過ごしてくれることなんだからね。

A君: Bさん、少し僕のことをほめ過ぎですよ。でも、認めてくださって、本当に嬉しいです。ありがとうございます。

「ソーシャルサポート」について

Bさん: A君とのコーピングの話もだいぶ長くなったし、お互い、仕事のある身だから、そろそろ切り上げることにするけど、最後に、ストレスへのコーピングを支えるものとして、「個人の持つ心理的・社会的資源」のことを言っておきたいな。

A君: 何ですか、その「心理的・社会的資源」というのは?

Bさん: このような資源を十分に持っていれば、それを効果的に利用することによって、ストレスにもうまく対処できる、つまり、コーピングが有効になりやすい、というものでね。健康やエネルギー、知的能力、問題解決や社会的な面でのスキル、前向きで肯定的な信念、お金のような物質的なものなど、色々であるけれど、僕としては、特に「ソーシャルサポート」を挙げたいな。

A君: その「ソーシャルサポート」って、どういうサポートですか? 社会から、ということですか?

Bさん: その人を取り巻く様々な人からの有形・無形の援助のことだね、それこそ、学校などでイジメっ子にイジメられていた子供の頃、言葉は交わさなくてもいつも温かいまなざしで見守ってくれる近所のおばあちゃんがいてくれたりすると、そのままざしだって、立派な「ソーシャルサポート」なんだよ。ソーシャルサポートが十分に得られると、人は、ストレスを生じやすい状況にもよく対処できる、つまり、コーピングがうまく働くようになるんだよ。

A君: コーピングがよく働く、ということは、ストレスを乗り越えられる、ということですか?

Bさん: まあ、ストレスの大きさや重さにもよるけど、ストレスの悪影響を受けにくくなる、とか、健康の悪

化が起こりにくくなる、ということは、期待していいと思うよ。

A君：Bさん、本当に色々と教えてくださって、ありがとうございました。ここから先は、Bさんのお話を十分に生かしながら、「コーピングの達人」でも目指したいと思います。今度お会いする時の僕を、楽しみにしててくださいね。

花を共に楽しむ

Bさんとの会話から得たことを思い出しながら日々を過ごすうちに、A君は、ふと、「そう言えば、僕の“花との付き合い”は、たいていの場合、ひとりだったよな。これって、気楽かもしれないけど、やっぱり寂しいよな」と、自分を振り返りました。サービス業に従事するA君の場合、「対人的ストレス」からの一時避難的な気持ちもあって、これまでは、花を自分一人で楽しむことをあまり気にしなかったのですが、ここ数日、Bさんが最後に言っていた「ソーシャルサポート」のことが、何となく心に引っかかるようになってきていました。花と付き合うコーピングとソーシャルサポートとの関わりを考えている時に、あの大好きな啄木の短歌が、再び心に浮かんできました。

友がみなわれよりえらく見ゆる日よ

花を買ひ来て妻としたしむ

「そうだ、この“妻としたしむ”というところが、ソーシャルサポートなんだ」と気付くと、A君は、何かの「大発見」をした時のような、無性に嬉しい気分になりました。啄木の短歌の中の「妻」の存在、すなわち、妻が自分の傍にいてくれて、自分と共に花を愛する気持ちを抱いてくれることは、花そのものにも劣らないくらい、大切なもの（ソーシャルサポート）なんだ、と悟りました。また、そのすぐ後に、啄木と苦楽を共にしながら貧しい生活を送る奥さんにとっても、やはり、そこにいる啄木の存在が、「ソーシャルサポート」なんだろうな、とも思いました。

あいにく、A君は未婚なので、花を「妻としたしむ」ことはできませんが、A君なりの形で、自分の周りの人々なども巻き込みながら、花と親しむ人生を続けていきたいな、と思うようになりました。仕事を通じて出会う人たちや同じマンションに住んで挨拶を交わす程度の関係の人たちとも、「花を共に楽しむ」交流が生まれ出せるのではないかと、という希望も、徐々に心に芽生えてきました。

ところで、A君には、花との付き合いのほかに、江戸や明治の頃の時代の浮世絵などを眺めて、絵の世界



冬の花店の店頭を飾るシクラメン

に心を遊ばせる、という楽しみもあるのですが、そのような絵の中にも、昔の老若男女が花を楽しむ姿が描かれています。A君にとっては、ホッとする世界です。昨年の秋には、園芸植物を描いた浮世絵が多く展示される催しがあり、A君も、大学の同期生を誘って訪ねてみました。絵の中で花を楽しむ人の多くは、同じ花を見た感想を他の人と語り合っているように見えました。一人でポツンと花と向き合う姿も、見られないわけではありませんが、「人々が花を共に楽しむ」様子が、A君には強く印象に残っています。

花は、人と人との間の「心の壁」を低くしたり薄くしたり、あるいは、ほとんど無くしてしまったりしてくれるのかもしれない。そう思うと、A君の心には、力が湧いてくるような気がしました。そして、サービス業に従事する中でのお客様との関係や、同僚との間に生じる摩擦などに苦しんできたA君には、自分が親しんできた花が、自分の「一時避難の場」（情動焦点型コーピング）としてだけでなく、自分を悩ませてきた人間関係そのものの改善（問題焦点型コーピング）にも役立つのでは、と考えられるようになりました。実際に行動に移す際には、様々な問題が起こるかもしれませんが、A君には、何故か、うまくいくような気がしています。親身になって相談に乗ってくれたBさんの存在も、A君には頼もしい「ソーシャルサポート」となったのです。

【A君が図書館で出会った主な文献】

- ・ 応用心理学事典／日本応用心理学会（編集）／丸善／2007年
- ・ 心理臨床大事典／氏原寛ほか（編集）／培風館／2004年
- ・ 心理学総合事典／海保博之ほか（監修）／朝倉書店／2006年
- ・ ストレスと健康の心理学／小杉正太郎（編集）／朝倉書店／2006年
- ・ 自分でできるストレス・マネジメント 活力を引き出す6つのレッスン／島津明人ほか（著）／培風館／2008年

ホトトギスとの出会い

新潟大学農学部

中野 優

私は平成5年に千葉大学大学院自然科学研究科を修了し、岩手生物工学研究センターで1年間のポスドクを経験した後、平成6年に新潟大学に着任しました。学生時代には園芸学部植物細胞工学研究室で三位正洋先生に師事していたこともあり、現在は、新潟大学農学部園芸学研究室において、バイオテクノロジーによる単子葉花き園芸植物の増殖や育種に関する教育・研究を行っています。用いているおもな材料は、ユリ類、アガパンサス、ムスカリ、ホトトギス類、グロリオサ、サンダーソニアなどです。なかでも、組織培養による増殖・保存、突然変異の誘発、胚救出、遺伝子組換えなど、多岐にわたる研究に用いているのがホトトギス属の植物（ホトトギス類）です。

ここでは、私のホトトギス類との出会いとともに、ホトトギスを研究材料に用いることになったきっかけ、そして、現在ホトトギスを用いて行っている研究について紹介したいと思います。

1. ホトトギス類との出会い

私は、栃木県の北西部、旧今市市で高校時代までを過ごしました。盆栽愛好家であった父方の祖父および野菜の栽培を趣味としていた母方の祖母の影響を受けて、物心ついた時から野生・栽培にかかわらず花が好きでした。実家は市街地にありましたが、少し歩くと田園地帯、その奥には低山が続いており、春から秋にかけてさまざまな野生の花を見ることができました。そんな植物のなかにあったのが、ヤマジノホトトギスです。渋くて味わいのある姿に惹かれ、祖母に名前を聞いたことを覚えています。これが、記憶に残っている私とホトトギス類との最初の出会いです。確か、小学6年生くらいだったと思います。

2度目の出会いは、大学1年生の時でした。当時所属していた「植物同好会」の9月の月例会で丹沢に行った際に、沢沿いの崖から下垂する植物の先に、黄色い

釣り鐘型の花が咲いているのを見ました。「植物同好会」には植物好きの先輩方が大勢おり、この植物の名前がサガミジョウロウホトトギスであることはもちろん、小学生の時に見たヤマジノホトトギスと近縁であること、乱獲により個体数が激減していることなどを教えてもらいました。地味なヤマジノホトトギスと優美なサガミジョウロウホトトギスとが、なかなか結びつかなかったことを覚えています。

その後、図鑑での調査や、さまざまな地方の山歩き、山野草店巡りを通して、ホトトギス類の多くが日本原産であること、日本で絶滅の危機に瀕している種が多いこと、観賞価値が高い野生種が多いこと、花の色・形や草姿などの形質が種間で大きく異なること、少ないながらも品種が育成されていることなどを知りました。また、山野草店で購入したいいくつかの種・品種を栽培し、栽培のしやすさが種・品種によって大きく異なることも知りました。そんなことをしているうちに、私のなかで、ホトトギス類が特別な植物のひとつになりました。

2. ホトトギス類を研究材料に用いることになったきっかけ

ご存知のように、新潟県では、ユリ類やチューリップなど、花き球根類の生産が盛んに行われています。私は、学生時代はナデシコ類を、また、岩手生物工学研究センターではリンドウを材料に用いて、バイオテクノロジーに関する研究を行ってきました。しかし、せっかく新潟に赴任したこともあり、新潟大学では、おもにユリ科の花き園芸植物を用いた研究を行うことにしました。

しかし、実際に研究を始めてみると、チューリップではバイオテクノロジーの基本である組織培養が非常に困難でした。一方、ユリ類は組織培養による増殖は容易であっても、遺伝子組換えなどの技術の応用が困

難であり、研究は遅々として進みませんでした。その後、これらの主要な花き園芸植物を用いた研究を続ける一方で、遺伝子組換えが容易な単子葉花き園芸植物の探索を開始しました。調査した植物は、アガパンサス、ムスカリ、ヘメロカリスなど、10種類以上に及びます。これらのうち、アガパンサスやムスカリでは遺伝子組換えには成功したものの、遺伝子組換え効率が低く、遺伝子の機能を解析するような研究には用いることができませんでした。また、これらの植物では、遺伝子組換え植物が得られても、それが開花するまでに数年を要し、導入した遺伝子の機能を確認できるまでに時間がかかることも問題でした。

そんな時に思い出したのがホトトギス類です。ホトトギスも、ユリ科の単子葉花き園芸植物のりっぱな一員です。さっそく、数種・品種のホトトギス類を用いて組織培養を行ってみたところ、効率は高くはないものの、葉や花卉（花被）からエンブリオジェニックカルス（不定胚を分化し、植物体を再生する能力がある細胞の塊）が誘導できることがわかりました。特に、ホトトギスとタイワンホトトギスの種間雑種品種では、増殖が旺盛で、多数の不定胚を分化するエンブリオジェニックカルスが得られました。単子葉植物では、このようなカルスが遺伝子組換えの材料として適していることが知られています。そこで、さっそくホトトギス種間雑種品種のエンブリオジェニックカルスを用いた遺伝子組換えを試みたところ、アガパンサスやムスカリとは比較にならないほど、効率的に遺伝子組換え植物を作出することができました。しかも、これらの遺伝子組換え植物は、うまく栽培すれば約1年後には開花しました。こうして、ホトトギス類を用いた研究が開始されたわけです。今から8年くらい前のことです。もしも、ホトトギス類について特別な思い入れがなければ、今でも遺伝子組換えが容易な単子葉花き園芸植物の探索が続いていたかもしれません。

3. ホトトギス類を用いた研究の現況

現在、おもに3つのテーマで、ホトトギス類を用いた研究を行っています。それらを簡単に紹介したいと思います。

3-1. 遺伝子組換えによる草型・花色・花形の改変

まずは、草型の改変です。この研究には、植物ホルモンの1種であるジベレリン（GA）を代謝する酵素の遺伝子を用いました。この遺伝子を導入して強く働かせると、植物体内の活性型GAの代謝が促進されて、



写真1 GA代謝酵素の遺伝子を導入した遺伝子組換え植物（右）と元の植物（左）

活性型GAの量が減少します。GAには植物の節間伸長を促進する作用があるので、活性型GAの量が低下した遺伝子組換え植物は草丈が低下し、矮性となりました（写真1）。

次に、花色の改変です。ご存知のように、ほとんどのホトトギス類の花弁（花被）には、特徴的な赤紫色の斑点があります。この斑点がホトトギス類の魅力でもあるわけですが、斑点がないスッキリとした花もあったらいいかと、以前から思っていました。斑点の色素を調べてみたところ、シアニン系のアントシアニン類であることが明らかとなったため、遺伝子組換えによる色素生合成の抑制を試みました。対象にした遺伝子は、フラボノイド系色素生合成経路の鍵酵素であるカルコンシンターゼ（CHS）の遺伝子です。遺伝子組換え



写真2 CHS遺伝子の機能を抑制した遺伝子組換え植物の花（右）と元の植物の花（左）



写真3 ABCモデルに関する遺伝子を操作した遺伝子組換え植物の花(右)ともとの植物の花(左)

えにより、この遺伝子の機能を抑制したところ、予想どおり、花卉に斑点がない純白の花が開花しました(写真2)。現在、色素生成に関する別の遺伝子を用いて、新たな花色の創造に取り組んでいます。

最後に、花形の改変です。通常の花は、外側から中心に向かって、がく片、花卉、雄ずい、雌ずい(心皮)で構成されています。これらの各器官が花のどの位置で分化するかは遺伝的に制御されており、それを説明するのがABCモデルです。このABCモデルに関与する遺伝子を操作することにより、例えば、通常は雄ずいが分化する位置に花卉を分化させることもできると考えられます。これまでに、雌ずいの代わりに雄ずいが分化するように操作した遺伝子組換え植物を作出しました(写真3)。遺伝子組換え植物では、雌ずいが雄ずいに完全に変化することはありませんでしたが、雌ずいと雄ずいの特徴をあわせもった、何とも奇妙な器官が形成されました。現在、すべての花器官が花卉に変化した、八重咲きの遺伝子組換え植物の作出に取り組んでいます。

以上のような、ホトトギス類の遺伝子組換えを通して得られた知見は、今後、ユリ類やチューリップを用いた研究を行う際に非常に有用であると考えています。

3-2. 培養変異(ソマクローナル変異)および

イオンビーム照射処理による有用変異個体の育成

ホトトギス類のように、育種がほとんど行われていない植物においては、新奇形質の誘導に突然変異が大きな効果を発揮することがあります。一方、組織培養を行うと、自然条件下と比較して、高頻度で突然変異が生じることが知られています(培養変異)。遺伝子組換えの材料にも用いたホトトギス種間雑種品種のエンブリオジェニックカルスを長期間(1年間以上)培養



写真4 培養変異により得られた四倍体(右)ともとの植物(左)

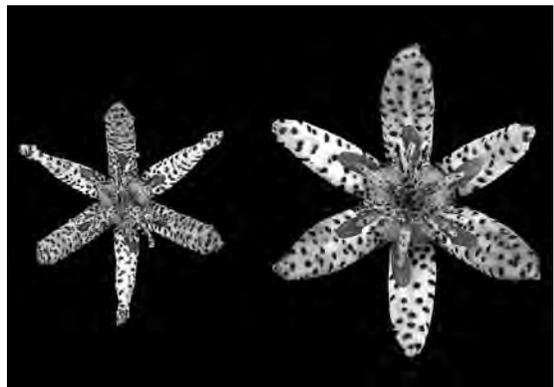


写真5 培養変異により得られた四倍体の花(右)ともとの植物の花(左)

し、その後で植物体を再生させたところ、再生個体のなかに明らかな変異個体が見いだされました(写真4、5)。この変異個体は直立性で、もとの植物と比較して、茎が太く、草丈が高く、葉が濃緑色で、花が大きいといった特徴を示しました。染色体を観察したところ、予想どおり、変異個体は染色体が倍加した四倍体でした。四倍体個体は、その特徴から、切り花として利用できるのではないかと考えています。



写真6 イオンビーム照射により得られた矮化変異体（右）と元の植物（左）

一方、培養変異よりも効率的に突然変異を誘発するために、理化学研究所の協力を得て、エンブリオジェニックカルスに炭素イオンビーム照射を行いました。イオンビームは放射線の一種で、最近、多くの植物で突然変異誘発のために利用されています。照射後のエンブリオジェニックカルスから植物体を再生させたところ、さまざまな変異個体が得られました。そのなかには、花の大きさや数は変化せずに草丈だけが短くなった個体が見いだされ、それらの形質は、3年間の栽培を経ても安定して維持されています（写真6）。この変異個体は、コンパクトな草姿から、鉢物に向いていると考えています。

3-3. 胚珠培養による種間雑種の作出

これまで、多くの花き園芸植物において、種間交雑が形質拡大に大きな役割を演じてきました。ホトトギス類においても、ホトトギスと台湾ホトトギスの組み合わせなどで種間交雑が行われ、品種も育成されています。私の研究室には、研究用として、また個人的に栽培しているホトトギス類が多数あることから、5年前に一念発起して、さまざまな組み合わせで種間交

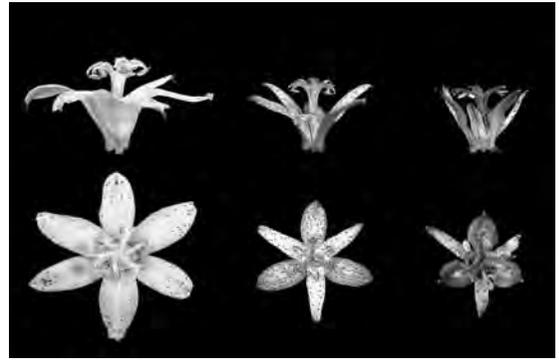


写真7 キバナノホトトギス（左）、台湾ホトトギス '青竜'（右）およびそれらの種間雑種（中）の花



写真8 台湾ホトトギス '藤娘'（右）、キジヨウロウホトトギス（左）およびそれらの種間雑種（中）の花

雑を行いました。交雑受粉後に胚珠培養を行ったところ、いくつかの組み合わせで種間雑種が得られました。それらのなかには、新奇な花を咲かせるものも見いだされており（写真7、8）、現在、詳細な形質調査を行っています。

以上のように、ホトトギス類を用いた研究から、いくつかの成果が得られはじめています。今後は、突然変異個体および種間雑種個体から品種を育成していきたいと考えています。

イラン探訪記 バラを訪ねて

岐阜県立国際園芸アカデミー

上 田 善 弘

なぜイランか？

イランに行ってみたくと思ったのは、20年以上前からである。

バラの研究を始めて30年、大学院時代の恩師故中尾佐助先生（大阪府立大学名誉教授、照葉樹林文化の提唱者）の影響を受けたためか、興味を中心は栽培バラのルーツを探ることにあった。

そのきっかけは、ブルガリアの香料バラ研究者による総説に掲載されていた1枚の図であった。その図には香料用バラの栽培が始まったのはイランの南、シラーズに近いところで、そこから中東、北アフリカ、ヨーロッパに伝わったことが描かれていた。この総説は多くの文献をもとに書かれたもので、信頼性は高いと思われる。現在のバラ栽培の主たる目的は観賞用であるが、原点は香料用である。つまり、世界で始めてバラが産業用に栽培されたのは、イラン（古代ペルシャ）ということになる。そのようなイランにいつの日か訪れてみたいと思っていたが、さすがに何らかのつてがなけ

れば訪ねられない国である。

特に、近年の周辺国（イラクとアフガニスタン）の状況やイランでの核開発問題に始まる国際関係などから、訪問は難しいと考えていた。ところがその機会が昨年開催されたバラの国際シンポジウムでめぐってきた。岐阜で開催した第5回国際バラシンポジウムにイランから数名の参加者があった。しかも、訪れてみたいと思っていた、シラーズからも参加者があった。シラーズ大学教授でバラの研究者コシュ・クヒ教授で、こちらのイラン訪問希望を伝えると、大歓迎とのことであった。それではと、まだ繋がりあたつかいうちに思い切って訪問に踏み切ったのである。出発は平成22年4月29日、帰国は5月11日、連休をいっぱい利用して訪問した。

いざイランへ

イランへは、中部国際空港からアブダビとドーハ（カタールの首都）を経由し、テヘランに入った。イマームホメイニ空港ではお願いしていた中東協力センター兼JETRO（日本貿易振興機構）のテヘラン駐在所長の山本洋一氏に迎えに来ていただいた。到着の翌日、最初の目的地、マシャド（テヘランの東、約1,000km）への国内便までに時間があるので、山本氏に絨毯博物館と考古学博物館をご案内いただいた。考古学博物館では、入場とともにその展示はネアンデルタール人で始まる。有名なシャニダールの洞窟は隣のイラク北部にあり、それに近いイラン北西部には多くの同様な洞窟があり、そのような古い時代までイランは遡るということである。石器から始まり、数多くの土器、ペルセポリスの遺跡の一部まで、見ごたえのある博物館であった。博物館内にイランの歴史についての詳細な年表の展示があり、日本より2000～3000年は遡れる比べようのない歴史の古さにふれることができた。



写真1 ナシル・アル・モルク・モスク（シラーズ市内）精巧な建物壁面のタイル模様とイスラムの典型的な中庭。タイルにバラの絵を多用していることから、ローズモスクとも呼ばれる

マシャドにて聖地の視察と野生植物調査

テヘランから夕方の便でマシャドに向かった。マシャドではお願いしていたマシャド大学のキアニ女史に迎えていただいた。彼女は、昨年の岐阜でのバラシンポジウムに参加していたバラの研究者の一人で、今回の渡航にあたっては随分お世話になり、今回の国内便航空券の予約と購入はすべて彼女にお願いした。じつは、日本の旅行社からはイラン国内便航空券の購入が難しく、しかも就航便の時刻等もなかなか把握できないことによる。

マシャドに到着翌日、大学院の学生を対象とした植物調査に同行させていただいた。マシャド大農学部園芸学分野の大学院の学生を対象とした野外植物調査で、植物科学研究センターから植物分類の専門家、ジョハーチ先生が現地での案内と指導を担当された。私にとっても現地の植物に詳しい研究者が同行されたことは幸いであった。植物に関する万国共通の言葉、学名でお互い話ができるためである。翌朝、6時出発とのこと。植物調査地がマシャドから西に約300kmも離れているためである。調査地はダルカッシュという地で、持参したGPSで測定したところ、北緯37度26分、東経56度46分、アルボルス山脈（テヘランとカスピ海の間にある山脈）の東に連なる山系のなかである。今回のイラン訪問での唯一の野生地調査で期待がふくらんだ。

本道からそれ、山岳のなかに入っていくと、周辺には珍しい自生植物を見ることができるようになった。すぐにバラの野生種があることを教えられ、車を停め、調査した。まず、どこにでも自生しているロサ・カナナ (*Rosa canina*) とともに黄色い花の野生種を発見した。ジョハーチ先生によると、ロサ・ヘミスフェリカ (*R. hemisphaerica*) とのこと、まさか今回の調査で見られるとは思っていなかった野生種である。本種の栽培



写真2 イランの野生バラの一種、ロサ・ベルシカ

型、八重咲きのは見ていたので、一重の野生型を見ることができたのは幸運であった。その後、学生やその他の先生とも合流し、山を散策することになった。植物を手に取りながら、ジョハーチ先生の説明が行われていった。ちょうど、チューリップ属、エレムス属、イリス属などの球根植物の開花時期で、山中いたるところで見ることができた。

この植物調査での大きな収穫はロサ・ベルシカ (*Rosa persica*) との出会いである。学名にあるように、もともとの原生はまさにイランである。本野生種はイランを中心に中央アジアを経て、カザフ共和国、中国新疆ウイグル自治区にまで分布する乾燥地のバラである。本種には一般的なバラ属の野生種にない特徴があり、葉が単葉となり、花卉の芯の部分に赤色が入り、花に目（ブロッチ）があるように見える。この野生バラが道路沿いの斜面に群生していた。私自身、この野生種の調査を中国新疆では何度か調査していたのであるが、そこでは山岳部ではなく都市部周辺や農地の周辺など平坦地でしか見たことがなかった。今回のイランでのような山岳部に自生しているのは初めてであった。

マシャド市はイスラム教の聖地であり、ハラメ・モタッハル広場（ハラム）を案内していただいた。この地がイスラム教の聖地の一つとなったのは、817年に8代目エマーム・レザー（エマームとはシーア派の最高指導者のことをいう）がこの地で殉教（信仰する宗教のためその生命を犠牲にすること）したことによる。シーア派の聖地としてマシャドは国内や周辺国から一年を通して数多くの信者が訪れることで有名な所でもある。広場の周辺にはこれらの訪問者のための多くのホテルがあるとのことであった。この広場に入るには、厳しいセキュリティチェックがあり、写真撮影も一切許されていなかった。また、女性はすべてチャドルという黒い布で頭から足首まで覆わなければならない。敷地内は広大なお祈りの場所であり、建物もイスラム建築の粋を尽くしたすばらしいものであった。

ところで、イランの国花はバラである。マシャド滞在中、道路の分離帯、公園、観光地など、市内のいたるところでバラの植栽を見ることができた。

香料バラ栽培の起源地、シラズへ

さて、今回のイラン訪問の最大の目的地、シラズへは、マシャドから飛行機で約1時間40分。シラズ空港では昨年のバラシンポジウムにも参加されたシラズ大学コシュ・クヒ教授に迎えていただいた。シラズ滞在中は、教授が不在となられることが多く、

現地を案内してくれる大学院生、キャラミ君もいっしょに迎えてくれた。

シラーズはテヘランの南、約 600km、ペルシャ湾に沿ったザグロス山脈中、標高 1,600m のところに位置する。エジプトまでも支配した広大な王朝、アケメネス朝はこの地方から起こった。翌日、シラーズ地域の古い香料バラの産地、メイマンを訪ねた。メイマンはシラーズの南、約 100km のところにある。この地方はブドウの有名な産地であり、ブドウ畑を眺めながら乾燥した大地を抜け目的地に到着した。

現地では、ハーブティーで迎えられ、しばらく歓談の後、水蒸気蒸留法によるローズオイルとローズウォーターの生産現場を見せていただいた。一釜に 40kg のバラの花と 80 リットルの水を入れ、加熱し蒸留するという。品質のよいものは 1kg の花に対し、1 リットルのローズウォーターが得られるようにすることだという。道路に面したところには直営のローズウォーター専門店があり、こんなにも需要があるのだろうかというほどのボトルが陳列されていた。

この後、この地域で最も古いローズウォーターの生産者のところとバラ園場が隣接する生産会社を訪問した。今年の春は例年になく高温で推移したため、ダマスクローズの花の最盛期は過ぎているとのことであったが、園場では残り少なくなった花の収穫が行われていた。現在は一人の労働者が一日で約 20kg の花を摘むという。最盛期には一日に 70kg も摘むそうである。その最盛期には 1 ha に 20 人の労働者が花摘みをするという。ちなみに、花摘みの時間は早朝 5 時から午前 10



写真3 ローズウォーターの専門店

時までで、精油の発散量の多い時間帯に行われる。現地で聞いたところ、この辺りでのローズウォーターの生産は 2000 年前からという。文献では紀元前 1000 年以上前から生産されていたということなので、シラーズ地域では紀元前から香料バラの生産が始まっていたのは間違いのないであろう。

その翌日は、ピスタチオバターを生産工場と新しくローズウォーターの生産ラインを稼働している会社を訪問した。ピスタチオはもともとイランから中央アジア原産の植物であり、イランは世界一の生産国でもある。今回訪問した会社は、新たなピスタチオの加工品として、ピスタチオバターを生産していた。生のピス



写真4 ダマスクローズの生産園場、花摘み作業中

タチオを圧縮し、搾り出された汁液からバターを作る。そのままのものやフレバーをつけたものを試食させていただいた。そのままの方がピスタチオ独特の香りと味がして日本人にも好まれると思った。

その後、新しいローズウォーターの生産会社を訪問した。まだ、工場を開設してから4年目ということであったが、バラだけでなく、フェンネル、ミント、カモミールなどのハーブを主に、全部で20種類もの植物の蒸留ウォーターを生産しているという。製品のパンフレットをいただいたが、それぞれの製品について身体への効用が書かれていた。ちなみに、この工場で行われるダマスクローズはシラーズから約300km東のダラブの標高の高いところで生産されているという。ダラブはシラーズを含むファールズ州の最大のダマスクローズの産地であり、4,000haもの生産面積があるとのことであった。

また、イランではローズウォーターはダマスクローズだけでなくムスクローズ（ロサ・モスカータ）からも生産されるとのこと。実際、いたるところでムスクローズを見ることができ、街路樹にまで利用されていた。

ファールズ州だけでも4,500haものダマスクローズの生産面積があり、イラン国内には他にもカシャーンのような大きな産地もあり、相当な量のローズウォーターの生産量があると思われる。それらがどのように使われるのか、どのくらい輸出されているのかうかがってみたが、多くは国内で消費されるとのこと。如何にローズウォーターがイラン人の生活と密接に関わっているかを知ることができた。それらは飲用を中心に、化粧品や食品のフレバーにと利用されるようである。また、ローズウォーターはイスラム教のお祈りとも深い関係があり、お祈りの際にもローズウォーターが撒かれるのであろう。

イランの食事

イランの主食は米とナンと呼ばれるパンである。国全体が乾燥したイランであるが、テヘランの北のアルボルス山脈の北は結構、降雨があり、カスピ海沿岸の水田地帯では稲作が行われている。そんなことから、私にとってはありがたく、いつでも米を食べることができた。もっとも日本の米とは異なり、長粒で、インデイカ米より長い米粒であった。この米をピラフのようにし、サフラン（イランはサフランの世界一の生産国でもある）で黄色く色をつけたものをよく食べた。ナンにもいろんな種類があり、焼き方の違いにより厚かつ



写真5 博物館の庭園におけるバラの植栽（シラーズ市内）

たり薄かったりする。これらの米やナンに、キャバーブと呼ぶ、羊、牛、鳥の焼き肉と、それに野菜を付け合わせて食べるが多かった。もちろんこれ以外にも煮込み料理や魚料理など様々であった。イランでは、当然、アルコールは御法度であるが、その代わりノンアルコールビールがどこにでも置いてあり、私は専らノンアルコールビールを飲用していた。

以上、出発前から滞在中までいろんな方にお世話になり、無事、目的を果たすことができた。なかなかビザの取得、イラン国内便の予約もままならないなか、直前まで本当に行けるのだろうかと不安であった。だが、旅行社の担当の方、イランでの受け入れ先の方々のお陰で、万全な状態で出発でき、イランでも予定どおり何のトラブルもなく調査、視察できた。訪問前からイランは危険な国であるような印象をもっていたが、全くの杞憂にすぎなかった。人々は親切で寛容であり、ホスピタリティの豊かな国民であった。政治体制による様々な規制があるものの、思っていた以上に人々の顔に明るさがあるように思われた。文化遺産が多く残された歴史のあるすばらしい国であった。より多くの人にイランに出かけていただき、交流をもってほしいと願っている。

ヒマラヤのテント植物とセーター植物を訪ねて ～東チベットとブータンのフラワートレッキング～

熱 田 健

我々が高山植物（高緯度植物）と呼んでいる仲間に、その厳しい環境から、植物体を守るために組織自体の耐寒性を得ると共に、花や実を守るため、様々な形態を進化させて、究極の草姿を得た一群の植物がある。ヒマラヤ山脈の厳しい気象条件下で独特の進化を遂げたある種をさして、俗にテント植物とかセーター植物と言われている。前者の代表がレウム・ノビレ（セイタカダイオウ）とサウスレア・オヴァラータ、サウスレア・ブラクテアタ等の（ボンポリトウヒレン）であり、後者のそれはサウスレア・ゴッシピフォラ、サウスレア・トリダクティラ等の（ワタゲトウヒレン）である。幸いここ3年程で、その両方を見に行く事が出来たので報告したいと思う。

東チベットでテント植物に会う

先ずレウム・ノビレ（セイタカダイオウ）であるが、今から十数年前に『週間朝日百科—植物の世界』という写真集がでたのを、ご記憶の方が多いと思うのだが、その中に紹介されていた。霧の中の瓦礫の斜面にスッキリと立ち上がっている真っ白な筍の様な姿を見た時は、強烈な印象を受け、いつかは本物を見てみたいと思っていた。

ゆくりなくも4年ほど前、ネパールのアンナプルナ内院のフラワーウォッチングの旅に参加する機会を得たのだが、その時に、このレウム・ノビレが話題になったのである。しかし残念ながら「ネパール側でこれを見るには、6,000 m近くまで登る必要がある」とのことだった。この時の目的はヒマラの青いケシの中で、最も美しいと私が思っているメコノプシス・ホリドウラをこの眼で見る事だった。とにかく初めてのヒマラヤのトレッキングだったので様子も判らず、ただ友人のガイドに着いてゆくだけの1週間ほどの旅だった。

気をつけてはいたのだが、殆ど全員が激しい下痢に悩まされていた。標高 5,500 mほどまで、息も絶え絶え

になって到着し、やや貧弱ではあったが、岩陰に咲くメコノプシス・ホリドウラをかるうじて見つける事ができた。同行のメンバー2人が高山病で調子が悪いため、早めに下山せざるを得なかったのだが、少し残念ではあった。

翌年はランタン谷のトレッキングに参加したりしたのだが、一昨々年、ある企画会社から、このレウム・ノビレが、チベット側なら極めて容易にウォッチング出来、参加者を募っているとの情報を得、早速参加することになった。

場所は東チベットの林芝（リンチー）付近、八一鎮（パーイー）にある標高 4,500 m程のセチ・ラ峠である。



写真1 *Rheum nobile* セイタカダイオウ 草丈 1.5m 東チベット セチ・ラ峠付近



写真2 *Saussurea obvallata* ボンボリトウヒレン 草丈 80cm
東チベット セチ・ラ峠付近

林芝までは中国の成都から空路があり、八一鎮までは車で1時間程である。そこで宿を取り、マイクロバスで、峠まで登る訳だが、東チベットは西に比べて植物が圧倒的に多く、標高3,000 m付近までは森林に覆われている。幹線道路も中国の肩入れでしっかりした物が作られ、峠超えの川蔵南路というルートも快適なドライブが楽しめる。峠は見渡す限り素晴らしいお花畑で、車を降りてすぐに、色とりどりの花々に混じって、サウスレア・オヴァラータ（ボンボリトウヒレン）の大株がそちこちに、白いボンボリを揺らして迎えてくれた。高さは70～80cmはあるだろうか、白い苞葉を撒くってみたら、中から虫が飛び出してきた。

そこから30～40分ほど水平に広い尾根道を西に辿ると、数百メートル先の瓦礫の斜面に、真っ白なレウム・ノビレ（セイタカダイオウ）が立っていた。正に息を呑む一瞬である。標高が高いので駆け寄りにはいかなかったが、見渡せばその先の広い斜面に、50～100 m間隔であっちにもこっちにも立っているではないか。その間にも先程のボンボリトウヒレンもたくさんある。ようやく近づいて、そっと触れて見る。高さは優に2 mを超え、その見事な存在感に我を忘れて見入ってしまった。

ブータンにセーター植物を訪ねて

チベットでは2種類のテント植物を見る事ができたわけだが、そうすると、セーター植物の方も是非見たくなる。綿毛で植物体を覆う植物は、サボテンの仲間

にもあるし、ある種のウスユキソウなどの様に、殆ど毛に覆われた物も少なくない。そんな中で、ワタゲトウヒレンは稀少の極みであるし、品格、存在感において、抜きん出ていると思う。

今年の2月に、南アフリカの東側、ドラケンスベルグのトレッキングから帰って間もなく、やはり同じ企画会社から、このワタゲトウヒレンとネパールでは貧弱な株しか見られなかった青いケシ、メコノプシス・ホリドウラもたくさん見られるブータン王国でのフラワーウォッチングの新企画の案内が届いた。年に2回の遠征はいささか重く感じたが、足腰が動く内という事で、再び夫婦で参加することにした。

但し今回は今迄と違って、宿泊がホテルやロッジでなく、全行程14日の内、9泊のテント泊りという。当然その間はシャワーは無い。幸いと言うか、妻は稲毛時代のワングルの後輩で、かなり悲惨なテント生活を何度か体験している。故に臆せず参加したのだが、ちなみに今回の参加者11人の内7人は女性で、年齢も我々が最若年であった。キャラバンは我々11人の参加者と、現地のポータ10人、馬曳き7人、コック1名、ガイド頭1名、それに馬とロバ22頭という大所帯で、7月3日、ドゥゲゾンを出発した。

ブータンへはバンコクからバングラディシュのダッ



写真3 *Cypripedium himalaicum* ヒマラヤアツモリスウ 草丈 25cm
ブータン王国 ジャングタン付近

写真4

Saussurea gossypiphora ワ
タゲトウヒレン ブータン
王国 ポンテ・ラ峠付近
(4,890m)



カ経由で入る。空港は首都ティンブーの、20kmほど西のパロという山村にある。着陸態勢に入ってから、山すれすれの旋回にはいささか驚いた。ホテルに入る前に、高度順化をかねて、チェレイ・ラ峠（標高2,570m）までバスで登った。そこでさっそくメコノプシス・パニクラータの群落、プリムラ・スミソアーナ（シッキメンシスに似ている）、イリス・クラルケイの群落、緑の釣鐘メガコドン、そして青いケシ、メコノプシス・シンプリキフォリア、キプリベディウム・ヒマライクム（ヒマラヤアツモリソウ）、白い大輪のアネモネ・ルピコラ等々、初日の足慣らしで30種以上の特記に値する植物達との出会いがあった。

それから2日間は川沿いの森林の中に行くことになる。夥しいアセビの道を歩いた。天気はモンスーン真っ只中には比較的良好、傘をさしたのは2日目の午後1時間足らずだった。途中で後発の馬の列に追い抜かれたりしながら、次から次に出てくる花々のウオッチングを楽しんだ。メコノプシスも前出のシンプリキフォリアの他に、プリムラもかなり見つけることができた。また希少種のキプリベディウム・エレガンスを妻が見つけ、ガイドを喜ばせたりした。ヒマライクムも多い。見渡すかぎりのプリムラ・シッキメンシス、白いクレマチス、その他マツムシソウ、フウロソウ、アンドロサケ等々、50～60種以上の特記すべき花との出会いがあった。キャンプ場に着くと既に設営が終わっていて、快適なテントにすぐ入って午眠が取れるのが有り難い。食事は全員でメインテントで摂る。一応スープから始まり、デザートは缶詰の果物がついた。朝食はお粥かトースト、コーヒー、紅茶を自由に飲む事ができた。

キャラバン3日目はチョモラーリ（7,320 m）が見え

るシャンゴタンのキャンプ場で迎えた。山頂はほんの一瞬しか見られなかったが氷河の向こうに聳える峰はさすがに迫力がある。ここは2泊の予定なので終日チョモラーリ氷河方面の広いお花畑でウオッチングを楽しむ。前出のメコノプシス・パニクラータの咲き始めの株が群落を作っているのが圧巻だった。この日も終日晴天で30～40種の花々を数えることができた。

そして6日目、朝の登りはかなりキツかったが、待望のメコノプシス・ホリドウラの立派な株をたくさん見ることが出来た。そして同じ瓦礫の斜面に転々と、メコノプシス・ディシゲラやラケモーサと思われる大きな株が数え切れない程咲いている。その間にセツレンや、やはり綿毛に覆われたエリオフィトン、地面にピッタリ着けた大きな葉の中心に紫の花を着けるエリオフィトン、数種のプリムラ、ウスユキソウなどなど、まさに楽園に遊ぶ至福の時間を過ごすことが出来た。

そして7日目、苦しい登りの果てボンテ・ラ峠の瓦礫の斜面で、ようやくワタゲトウヒレンに会う事が出来た。岩の間に真っ白な綿毛に包まれてうずくまる様に咲いているそれとの対面は、チベットでのレウム・ノビレ以来の感激であった。

その後は2日かけての下山だったが、終始花の絶え間がない、素晴らしいルートだった。途中の斜面にキプリベディウム・チベティクムの見事な小群落を私が見つけ、そこで小一時間も撮影の時間を費やしてしまった。やや深い谷の向こうの斜面にボンボリトウヒレンが幾株か生えていたが、行く事は無理と思われ諦めた。そこからの下りは永遠と思われる程長く傾斜も強かったが、最後のキャンプ地手前でようやく平坦になり、心配していた膝痛も起こらず、無事に行程を終える事ができた。

きな珍しい花というので、多数の観覧者が押しかけました。

私にも神代植物公園時代に、同じような思い出があります。1985年の8月下旬、前年にオープンした大温室で、本物の夜来香（イエライシャン）の花が日本初公開となり、幻の花としてニュースに流れ、いつもなら人影もまばらな残暑の植物公園が大賑わいとなりました。夜来香は戦前の歌謡曲でよく名前を知られていたものの、当時それとして広まったのは別の植物（月下香）で、今度のものが正真正銘の本物、しかも導入から公開までに15年を経過していたことが、ニュース性を大きくしました。

実はこの夜来香は、私が1970年にタイのバンコクで見つけて、持ち帰ったものでした。1975年に初開花して確認したものの、当時公開観覧用の温室がなかったことと、私が都庁に転勤して在職しなかったこともあり、未公開のままに置かれていたのです。

この公開によって、テレビや新聞などの取材があり、一介の職員に過ぎない私の名前や顔がニュースに流れ、マスコミの力の大きさにも驚きましたが、お客様にも広く知っていただき、様々な分野の方々と親しくなれ、のちの植物園活動に力が付きました。

夜来香は、ただ偶然に持ち帰ったわけではありません。私が1957年に千葉大学に入学した時、教養課程の植物学で渡辺清彦教授の講義を受けました。ある日先生は一枚のスケッチを示され、この中には園芸の学生がたくさんいるが、日本の園芸界で夜来香としているものは月下香のほうで、本当の夜来香はこんなものなのです。このことが私の意識の中に、卒業した後も残っていました。それで1970年の11月、日本植物園協会の植物調査でタイ国を訪れた時、ぜひこの植物を見つけて持ち帰りたいと思ったわけです。

この植物図は渡辺先生が「植物を理解するには、写生図に及ぶものはない」という信念でライフワークとされたもので、戦時中にペナン植物園長として赴任中も公務の間に描き続けられたものです。敗戦によりシンガポール植物園に残されたこの図は、私達が学生になった頃に、親交のあった熱帯植物の権威、ケンブリッジ大学のコーナー博士の尽力によって返還を受け、講義の都度様々な有用植物の図を見せて下さったのです。

夜来香は中国南部からインドシナに自生する熱帯性の蔓草で、十分に蔓をのばした高温期に花をつけます。緑黄色径20mmほどの美麗なものではありませんが、その香りはただものではないのです。いやな臭いという

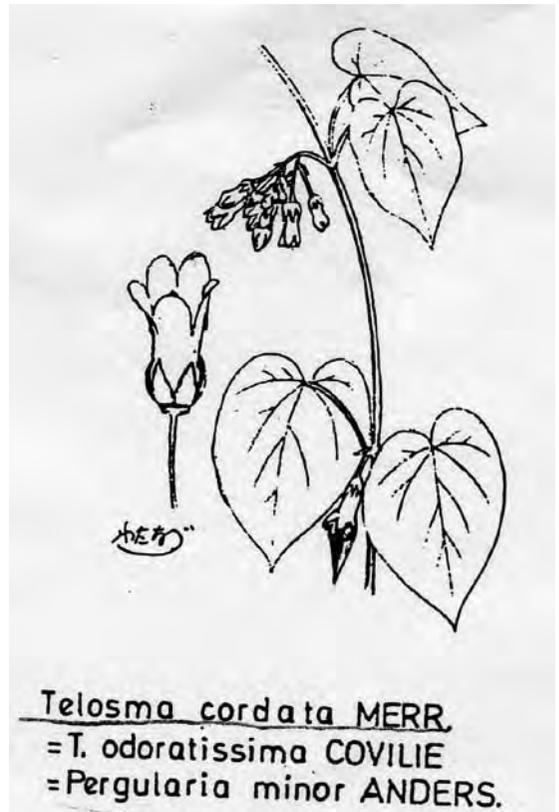


図1 渡辺清彦先生の夜来香の図
〔熱帯植物集成〕より転写

人も少数ありましたが、多くの人の感覚では黄色のパラの香りに少し青臭さを加えたようで魅惑的です。麝香様な香りも含まれているようですから、ミセスの香りなのでしょう。香りは性的な興奮を醸すものでもあり、昔から夜来香が珍重された理由だと考えます。

昼間も香りますが、夜には濃淡の波となって暗闇の彼方からおしよせ、途切れることはありません。広州やシンガポールではこの花をスープや料理に入れて食べ、摘んだ花が市場で売られるのをテレビで見ることもあります。残念ながら、私はまだ現地で食べる機会がありません。

私はバンコクの市内で週末に開かれるサンデーマーケットで、夜来香の苗を見つけることができました。売っていたのはただ一軒で、一緒に行ってくれたランが専門のタイの大学院生の女性は、この植物を知りませんでした。私が頼りとするのは渡辺先生のスケッチのみ、しかし子供の頃から植物を観察してきた勘によって、これこそ夜来香に違いないと判断し、念のために葉を一枚ちぎってみると、予想したとおり白い乳汁が出ました。夜来香はガガイモ科の植物で、この仲間と共通する性質だからでした。

大きなニュースとなった夜来香でしたが、世間には広まっておりません。その後園芸店で鉢作りが売られているのを見ましたが、売れ残っておりまして。夜来香という名前とその香りには魅力があっても、姿は野草そのものでガガイモに似ています。近縁のマダガスカルシタキソウはつやのある濃緑色の葉に香りの良い白い花が目立ち、鉢物として人気がありますが、これと比較すると何とも商品価値の低い植物とされてしまうでしょう。サンデーマーケットには、多くの人が通われていたはずなのに、誰一人夜来香に目をつけなかったのは、この植物が売り物になる園芸植物として評価されないからでしょう。だからこそ私が見つけて持ち帰り、植物園で育てて見せることに意義があったと思います。

園芸遍歴から桜草へ

私は愛知県の田舎町に生まれ、花を楽しむなどとは罵られた戦争の時代に物心がつき、平和な時代とともに成長したおかげで、植物を楽しむ仕事をして生きてくることができました。農家ではありませんでしたが、田舎でも食糧難の時代でしたから、誰もが畑で作物を育て、子供たちも手伝って働き、これが後に役立ちました。

家には植物好きだった父親が買い揃えていた植物図鑑類があり、牧野植物図鑑と石井勇義氏編集の原色園芸植物図譜（改定版）は、小学生のころから絵本と同様に毎日のように開いて、庭の植物と見比べておりました。この園芸植物図譜は、戦前の本としては画期的なカラーの写真版で、上中巻には西欧や温室の植物が、下巻には日本の園芸植物がもれなく収録されています。当時は学校にも植物図鑑類は揃っておらず、たいへん恵まれた環境にあったと、これだけは父親に感謝しております。

こうして図鑑類を毎日見ているうちに、野生樹木から園芸草花までが私の基礎知識として頭のひだに挟み込まれていったようです。中学生になるころには、日曜には胴乱をかついで植物採集に出かけ、押し葉にして野生の植物を覚えました。家の庭では園芸に明け暮れ、サボテンからアサガオやキク、ダリアやグラジオラス、やがてバラやサクラソウ、ツバキという具合に、野生のものから園芸植物、和洋の別なく対象が広がってゆきました。受験勉強などなかった時代でしたから、親も周りの人も少し変わった子供だという認識は持つものの、学校の成績で何かを云われたことはありませんでした。

あらゆる植物に関心を広げても、すべての植物が育てられるわけもなく、他人が手をつけられない植物こそ私が手がける分野だという思いが芽生え、その一つが桜草だったようです。

先の原色園芸植物図譜の中に、桜草の園芸品種が十数点掲載されており、初めて見たときから、何と美しい愛らしい花なんだろうと、子供心にも深く感じたものでした。1958年の春に、前年に発足した「さくらそう会」から配布苗を受け、初めて育ててみると私が思っていた通りの美しい草花で、生涯を通して育ててゆくことになったわけです。

「さくらそう会」は、同窓の大先輩である大山玲瓏氏が世話人になって設立された趣味園芸の会で、江戸時代に園芸草花に育てられた桜草が、戦争で絶滅寸前の状態にあったものを保存普及することが目的でした。上京後は一番若い会員としてお手伝いをし、現在も世話人として、会の運営に関わっております。

それから半世紀あまりたち、先輩会員方の地道な活動によって桜草は全国に愛好者が広がり、絶滅を危惧する人はいなくなりました。本当に美しいものは誰かが残してくれる、決して失われることはないという確信を持つことができました。

桜草は高原生でありながら以外に性質が強く、ブルームラのなかでもっとも暑さに耐える植物で、江戸時代に生まれた園芸品種が生きて伝えられております。ただ長い歴史の間には災害や戦争の混乱期があり、異名同品や間違いも多く、桜草を保存し普及してゆくには何百も存在する品種を調査して、整理しなければなりません。大山氏をはじめ先輩方も努力されましたが、途中からこれは私の仕事と考えて、今日までに整理統一をほぼ完了しました。長年多くの植物を観察してきた経験と、少しばかりの遺伝・育種の知識、古いしがらみにとらわれない世代であったことで、進めることができたと思います。一つの品種には対応する一つの名称をあて、さくらそう会認定品種とするやり方を軌道に乗せました。この結果はその都度会の総会で決定して発表しましたが、私の名前で発刊されました2冊の図譜で、公表しております。「さくらそう」日本テレビ出版部発行・絶版（1985年）、色分け花図鑑「桜草」学習研究社（2006年）です。

桜草づくりは、楽しみのために趣味として育てられてきた伝統があり、古い歴史的な園芸品種が捨てられずに残されてきました。現在300あまり存在する品種の三分の一にあたる100品種が、江戸時代から生き続けてきた文化財ともいえる存在です。



写真2 「桜草花壇」江戸時代の観賞方式を再現したもの



写真3 桜草「山下白雨」(鳥居選抜命名)

我が家では品種の維持と会員への配布のために育てているので、うまく育てようという意志はもっていません。沢山の中には少しは咲きそろうものもあり、展示会に出展し、自宅にも桜草花壇を組み立てて飾り、公開日を決めて見ていただいております。

江戸の園芸文化

私は植物だけでなく、古くからの日本の文化にも興味を持ち、古い絵画や芸能、歌舞伎や人形浄瑠璃なども面白いと思いました。義太夫の語りなども中学生の頃には普通に聞き取れ、内容もよく理解できました。そんな子供ですから学校でも古文は得意で、現代語訳

するまでもなく、原文のままでよくわかりました。耳から聞いた邦楽の章詞や云いまわしは、古い文章を読むのに役に立ち、さらに変体がなや崩し字、当て字、決まり文句などがわかれば、江戸時代のものなら何とか読むことができます。高校時代から断片的ですが様々な資料を見て、江戸時代の園芸の有様を知ろうとする努力は続けております。

こんなわけで縦書きの日本語には自信もありますが、横文字のほうはさっぱりだめで、読むことも書くこともおぼつかなく、欧米語は今も不得意です

千葉大学に入った1年目に古文の講義を受けたとき、教材の中に「西鶴置土産」がありました。その中の一章に下谷の裏長屋に住む老婆が、垣根に枯れ残った朝顔の蔓からたねを集める描写があります。そのたねをどうするのかと尋ねると、来年春にこのたねを蒔いて、また夏に朝顔の花を楽しみますのじゃ。この文章を読んだ私は、これこそ江戸の園芸の本質を物語るものとして、強い感銘をうけたのでした。西鶴の作品には情景描写の部分に、実際に見聞きした暮らしの一端がありのままに表現されているのです。

西欧では園芸は王侯貴族の楽しみで、富と権力を誇示するものだったのです。江戸の園芸も大名や金持の楽しみでしたが、貧しい裏長屋の老婆であっても、その日暮らしのなかで、朝顔を楽しんだという事実が、文芸の中に伝わっていることは驚きです。庶民もそれ

なりに園芸を楽しんだというのが、江戸の園芸の大きな特色だと私は云いたいわけです。

園芸は都市で生まれるもので、農村は生産地ではあっても園芸を楽しむところではありません。江戸で園芸が発展したのは、人も物も金も集まってくる大消費都市になったからです。園芸もその市民活動の中から生まれた文化として、総合的に研究すべきものと考えております。政治や経済・社会に関する全体的な歴史を中心に、浮世絵や芝居、音曲、遊郭、俳諧、狂歌、黄表紙など最も江戸らしい世界にも踏み込まないと、深く理解することはできないでしょう。私はどうしたわけかこれらの世界にはたいへん興味がありましたので、同年代の人の中では詳しいほうに入っていると思っております。

嫌いな植物はありません

退職した後はどこへも所属せず、植物・園芸研究者という名乗りで普及活動をしてきました。研究者とはおこがましいのですが、ほかに云いようがないからです。立派な研究と評価される論文を発表し権威と認められるようなことは、無縁の世界で生きてきたのです。でも何事をやっても研究は伴います。いろいろなことを体験して、自分なりの見識を示すぐらいは許されるのかと思います。

私の立場でもっとも重要視しているのは植物の名前で、正確なあるいは適切な植物名を知らせるということです。園芸界では植物の種と品種の区別がなく、植物名よりも品種名のほうが重要視されることが多く、これには営業上の思惑が潜んでいます。現在の品種はたいへん利那的で、何年もたたぬうちに売られなくなり、忘れられてしまいます。だから何という植物であるか、その種の名前をはっきりと表示しなくてはならないのです。

次に大切にしたいのは季節感です。日本には古くから花鳥風月といわれて、季節の移ろいの中で植物を主体とした自然を楽しむ暮らしの文化が伝えられてきました。生産園芸の世界では経営上の問題もあって、季節感はずっかり失われてしまった感がありますが、せめて楽しみとしての園芸の世界では、季節の花を楽しみたいものだと思いますし、それがセールスポイントとなる営業もあるはずです。

私には現在嫌いな植物は一つもありません。子供の頃から植物に親しみ、長く植物園で様々なお客様のお相手をするうちに、どんな植物や花にもどこかに見どころがあり、その良い美しいところを見出して楽しむ



図2 ボタニカル・スケッチ No.1659
花業会海外調査ツアーに参加。豪州パース付近でスケッチの Tassel Flower。園芸植物としても使えそう



写真4 筆者：植物はハマトラノオ（ゴマノハグサ科）、九州甌島産の海岸野生植物。花友からもらい挿し芽と実生で繁殖。そのままでも園芸植物として扱える

るようになったのです。

渡辺清彦先生を思い出し、六十の手習いで始めたボタニカル・スケッチは、4,400点がたまり、私の植物図鑑となりつつあります。

JR 館山駅前花壇の設計を引き受けて

林 角 郎

年間2作で周年花を咲かせる花壇の設計

館山市ではJR館山駅の東口前にある直径約20mのロータリー花壇をこれまで長期間管理し、冬は特産のアイスランドポピー、夏はフレンチマリーゴールドなどを植栽してきました。しかし最近では予算削減により、管理がやや不十分となり、開花する期間が短く、雑草の発生もやや多い状態が続いていました。他方、筆者は平成18年から同市中央公民館の花壇を利用してボランティアの仲間を指導し、花を栽培して展示していました。その関係で、平成20年2月に商工観光課の職員から、この駅前花壇の設計の相談がありました。

その結果、設計を引き受けることになりました。まず夏作には公民館花壇の経験から、外側には矮性アフリカンマリーゴールドのパーフェクション系オレンジと黄に、白のホワイトパンナを加えて3品種を配し、その内側にセンニチコウのローズネオンと、さらに中央部にセンニチコウのストロベリーフィールドとラズベリーフィールドを入れ、すべて同心円型の配列で植えました。なお中心にはかなり大きなカナリーヤシが植えられているため、このあとの植栽のすべてがこのヤシを中心に配列することになりました。

使用する苗は他では安価に得られないため、同窓の南房パラダイスで活躍され、現在苗生産を行っている落合哲平さんに育苗をお願いし、6月4日に定植しました。この結果8月上旬に満開となり、一時見事になりましたが、当地は8月中降雨がなく、マリーゴールドは枯死株も出たため9月半ばに撤去し、センニチコウのみで10月末に切替えました。

次の冬作はやはり同心円型の配列で、一番外にスイートアリッサムを1列植え、その中にナチュレ系パンジーの6色の品種を配し、次にアイスランドポピーの矮性大輪のカクテル系紅、橙、黄の3品種を入れ、中心部はカナリーヤシを囲んで早生と中生のハナナを混播しておいたビニールポットを植えました。それぞれの生育は順調で、年末には揃って咲きだし、1月上旬にはかなり揃って咲きました。その後2月には寒さで一時的休み、3月から再開して4月末まで花いっぱい

状態になりました。しかし雑草には終始苦しめられ、5月連休過ぎに植物も弱ったため、撤去しました。

次の平成21年の夏作は、極力夏に強い花を選び、やはり同心円型で一番外側にイソトマを1列、次にマツバボタンの6色品種、次にジニアのスイズル系2品種を3列、さらにジニア‘プロフュージョン’の八重系3品種を入れ、中心部にセンニチコウのローズネオンを植えました。またマツバボタンの中にはハイビスカスのディスコベル2品種をスポット的に6カ所植え、立体感をもたせました。

この結果、スイズル系ジニアは早く花が終わりましたが、他はすべて夏の暑さに耐え、雑草も除草剤を植えつけ直後から使用してほぼ抑え、10月中旬まで完全な状態で、次の作に切替えました。これらの植栽で、新しい品種に関する情報は前述の中央公民館における試作結果と落合さんの助言が大変役に立ちました。

花壇にテーマを持たせて

次の平成21年秋の設計に当たっては、花壇にテーマをもたせたらと考え、当地にちなむ有名な物語として、滝沢馬琴の南総里見八犬伝をテーマとする植栽を工夫しました。このため8つの稜をもつ星型のデザインとし、それぞれの先端に円形の板をつけた柱を8本立て、安房の富山（とみさん）の洞窟で伏姫の首から飛び散った8個の数珠玉の中に描かれた「仁義礼智信忠孝悌」の8文字を張りつけました。植える花は平成20年と全く同様で、星の外側にはパンジーのナチュレ系8品種を、内部にはポピーのカクテル系赤、橙、黄の3色に、自家採種の白色系を加えた4色を2繰り返して配し、中央はこれも同様なハナナを早生と中生を別に播いて育苗したポットを交互に植えました。

肥料はこれまでも使用した緩効性のIB化成を十分に施用し、除草剤も植えつけ直後に処理して、管理に万全を期しました。この結果開花はかなり長く続き、ハナナは4月末に除去し、その他の花はすべて5月いっぱいまで続き、花壇の効果は十分に発揮されました。

次の平成22年の夏作は、その前年末に市側から22年秋に行われる国体にちなむデザインの注文が出され



平成 22 年夏作は千葉国体を記念して、千葉県を宿根サルビアの白とブルーで表現し、キャラクターの「チーバ君」をセンニチコウで示した花壇と四季咲きペゴニアで作られたトビアリー。館山駅 2F バルコニーから撮影(2010 年 10 月 1 日)

ました。このため本県のマスコットであるチーバ君を取り入れ、まず中央には県章の 6 稜の星形をそのまま模して配置し、駅寄りに 2 体のチーバ君を向き合わせ、稲作のあぜシートで枠を作って配置することにしました。この県章の中はサルビア・ファリナセアの白花種で、外側はサルビアのブルーキーンを植え、チーバ君の枠内には落合さんの発案でセンニチコウの矮性品種のポビーレッドとしました。これらはすべて平面の配置ですが、別に市内の観光施設のファミリーパークでチーバ君の大型トビアリーを作り、駅前にもってきていたのでそれも加え、表面は紅色の四季咲きペゴニアのポットを並べ、これで立体感を出すことができました。

この原稿を書く 8 月半ばには周囲のブルーサルビアがまだ満開になっていませんが、他は完全に咲き揃い、この様子は館山駅に作られている 2 階のバルコニーからの眺めが大変見事でした。

続くテーマ花壇のいろいろ

この後 10 月の切り替え後は、地元の昔の農民の動きの万石騒動で犠牲となり処刑された 3 人の名主の 300 年祭が秋に行われるため、それらにちなむデザインを予定しています。計画としてその時の名主 2 名が書いた訴状に傘型連判が書かれていたことから、外側に 2 個の扇状区分を作り 9 色のナチュレ系パンジーを 3 繰り返しで配し、中央は 3 稜の星型図形にアイスランドポビーの 3 色の品種を配して、それぞれの稜の先に犠牲となった 3 人の名主の名を記した柱を立てる予定です。

こうしたテーマの花壇アイデアはさらに続く予定で、今後の平成 23 年と 24 年のテーマと植栽内容は表に示すとおりです。この内容は担当する市の商工観光課でほぼ了承しているため、この通りに実現するものと思

われます。ただそれぞれの実施に伴い PR のために内容の説明板を設けたり、解説の資料が必要なのでその準備も今後考えなくてはなりません。

以上のように公共の花壇の植栽については、基本の装飾効果の他に地域にちなむ史実、物語、観光、イベント等のテーマ性を持たせ、多くの人から親しまれるものとなるよう努めることが必要と考えられます。これらについて今後も工夫していきたいと思っていますが、現状のお知らせまでに述べさせていただきます。

JR 館山駅東口花壇 植栽計画 (案) 平成 22 年 8 月現在

時期	花壇名	内容	目的	
平成 23 年	夏	館山港多 目的観光 棧橋ウミ ホタル花 壇その①	三方向に海と砂浜、市街地を示す植栽を考え、棧橋は模様で示す。ウミホタルは青色 LED で点滅表現する。	平成 22 年完成の棧橋に協賛し、ウミホタルを併せ表現することで雰囲気盛り上げる。
	冬	黒川 ス トック花 壇	黒川氏育成の各品種を草丈・開花期の別に配置して植栽、長期間の開花を計画する。星型の配置とする。	名誉市民で全国的にも有名な黒川浩氏の業績を公表し、安房地域のストック PR に利用。
平成 24 年	夏	館山港多 目的観光 棧橋ウミ ホタル花 壇その②	平成 23 年夏のデザインを改良。LED の点滅でウミホタルを表現。	平成 23 年のバージョンを変え、さらなる PR を図る。
	冬	花作り和 尚花壇	キンセンカの各品種を組み合わせさせて花壇造成。12 月から 4 月まで継続開花。星型の配置。	平成 25 年春が、安房地域で初めてキンセンカを東京に出荷して 100 年目となることにちなむ。初出荷者の岩永益禪氏の物語にちなんで花作り和尚の花壇とする。

走って稼ぐ、それが俺ンち流。

常陸洋らん園

黒澤達也

常陸洋らん園は茨城県ひたちなか市にあり、コチョウランの栽培をしています。私の父を筆頭に、母、妻、弟、そして私と、常時10～12人のパート従業員で取り組んでいます。栽培面積は約4000㎡で、鉢物が中心です。昭和49年に父がカーネーションの切花でスタートし、平成元年にコチョウランに転換、温室を増やしなが現在に至ります。最近では、重油の消費量を減らすため、ヒートポンプの導入（約半分の温室で稼働中。今年度は、未導入の温室への設置を計画中で、現在交渉中）や、温室側面の2層化を終え、現在は屋根の2層化に取り組んでいます。

花卉研を1999年に卒業してすぐ実家に戻り、仕事を始めて早いもので12年半が過ぎました。12年前に比べると、業界は大きく様変わりし、消費の低迷によって販売単価は著しく下落し続けています。12年前と比べて平均販売単価は同等クラスで見たとときに約半分となっていました。そんな厳しい状況の中で見つけた、当園の販売戦略をお話いたします。

自社用トラックの導入

2年前の夏に自社用トラックを導入しました。この頃から市場の評価が大きく変わり始めました。この頃、東京を中心に出荷をしていましたが、出荷量が増えて今までの市場だけではカバーできない状況になってきました。

出荷量が増えた一番の要因は、主力品種であるクリスタルホワイトの歩留まりが著しく良くなったためです。この品種は、花老けや花透けと呼ばれるトラブルを抱えたまま誕生した品種だったのですが、選別を繰り返して現在のように完成されたのがその頃でした。

このような背景があって、新しい取引市場を関西へと考えました。しかし出荷のために、多くの運送会社と協議を重ねましたが、条件面で折り合いがつかず話がまとまりませんでした。コチョウランはデリケートな

花です。温度については冷房と暖房を備え、且つ、ショックの少ないエアサスペンション車でなければ必ず商品が傷みます。そこで思い切って、自社用トラックの導入を決めました。もちろん、コチョウラン輸送の専用車で、関西の市場に荷物を運ぶためです。

関西の市場の評価はまずまずでした。せっかく関西まで荷物を運ぶのだから、車は満載で運びたいものです。今までの取引市場の荷物を減らして、関西へ出荷しました。すると、東京の市場への荷物が減ったために、こちらの相場も安定してきました。当園にとってみれ



写真1 クリスタルホワイト3本立 2L

ば、思わぬ副産物を得られました。この面だけでもトラックの導入はメリットがあったといえます。

話は少し戻りますが、導入を決めたのは2年前の4月下旬でした。関西に出荷するようになったのは7月、この間にも輸送面で多くの動きがありました。

コチョウランの動きが最も活発になるのは3月から4月の転勤、退職シーズンです。この頃になると出荷の荷物は著しく増えます。東京の市場へのお荷物はセリ1回あたり30～40ケース出荷していたものが、急に100ケースになります。

コチョウラン100ケースとは、ほぼ4トントラック1台分です。東京の中央卸売市場のセリ日は火・木・土で、その前日の月・水・金に市場専属の運送会社へ集荷に来てもらっていました。それが、荷物が多くなったことによりセリの前々日の集荷となりました。前々日集荷にはいくつかのデメリットがあり、気が進まなかったのですが、相対取引の増加に繋がるだろうと思い受け入れました。実際のところ、コチョウランの鉢物の約8割は前々日に市場へ入荷しているそうです。

しかし、母の日を過ぎると出荷量が少なくなり、運送会社の一方的な都合で前日集荷に戻されてしまいました。需要の少ない5月の母の日以後から6月下旬までは、案の定、価格を下げました。

東京の運送業者は、鉢物に弱い茨城の前々日集荷を基本的にはしてくれません。運送業者としてもデメリットが大きいでしょう。

自社用トラックのメリット

6月末、ようやくトラックが届きました。関西の市場へ運ぶために導入したはずでしたが、東京の市場へも運ぶことにしました。もちろん、前々日へ入荷させ、

相対取引に期待するためです。

運賃を考えてみると、ひたちなかから東京までは1ケース約550～600円。車の償却費を考慮しても1回のお荷あたり35ケース以上で採算がとれる計算になります。当時は平均40～50ケースを運び、現在は平均110ケース程度運んでいます。最近では運送業者に頼んだ場合と比較してみると1回当たり3～4万円もコストダウンできます。年間にしたら…。

輸送に関しては、他にもメリットがあります。コチョウランの鉢花といえば3本立がポピュラーなスタイルですが、5本立やそれ以上の規格もあります。今まで高い運賃がかかってしまうために5本立は注文でのみ出荷していました。しかし、今度は自社便のため、自由なスタイルで出荷することが出来ます。5本立を出荷しても運賃を気にすることがありません。また、単価の安いものについては従来2鉢入りで出荷していましたが、1鉢単位で出荷できるようになりました。

運送業者に委託していた時は、輸送傷みが頻繁にありました。業者は運賃を出来るだけ稼ぎたい理由で荷台の箱の中を立体パズルのように隙間無く詰めていきます。苗物と混載するため、荷室は土ぼこりにまみれ、太陽の照り付ける夏の暑い日も雪の降る極寒の日も、過酷な条件のもと運ばれていきます。ドライバーは植物輸送のプロかもしれませんが、コチョウラン輸送については扱い方が丁寧ではないかもしれません。

一方自社便はコチョウラン専用車なため、土ぼこりなどは皆無で清潔感があり、空調も完備されています。専用車はコチョウランの入ったダンボールをゆったりと並べるため、隣の花と干渉することはありません。今までは送付されてくる仕切書に多くの訂正があったのが、自社便になってからは全くなりませんでした。自



写真2 商品の荷姿

社便で運んでいる生産者の話でも、輸送による傷みは全く無くなったと聞いています。

納得できる値がついた

関西の市場への出荷は約3ヶ月で終わってしまいました。関西での市況が悪かったのではなく、東京の市場での価格に納得できるようになったためです。

今までは、前日集荷だったために市場での入荷が前日の夕方でした。そのため、多くの商品がセリにかけられました。それが前々日の夜には商品が市場にあり、花屋は入荷翌日の切花のセリ日に買って帰ることが出来ます。つまり、相対取引できる時間が増えたのです。現在のセリではご存知の通り、高値がつくことはありません。式に表すと

予約注文 ≥ 相対取引 ≥ セリ

となります。「常陸洋らん園のコチョウランは市場に行けばいつでも置いてある」と言う意識が花屋に根付いたといえます。

当園のコチョウランは相対取引しやすいとの評価も頂いています。①規格がしっかりしていて、ばらつきが少ないこと。つまり、商品を見なくても規格の情報のみで購入できること。②大振りでもなく小ぶりでもなく、扱いやすい中間サイズであること。③見た目の綺麗さ。仕立ては好みもあるとは思いますが、ばらつきが無く統一されたスタイル。また、花を包む和紙の丁寧さ。この3点が挙げられます。

写真1はクリスタルホワイトの3本立2Lで、当園でもっともポピュラーな商品です。10～11輪の組み合わせで延べ31～33輪程度になります。最近は1本あたり20輪程度を咲かせるコチョウランが多く出回るようになってきた状況からすれば、決して豪華な商品ではありません。むしろスタンダードすぎるくらいでしょう。

そんなスタンダードなコチョウランを買ってくださる花屋さんが、声をそろえて言うのは、「ヒタチのコチョウランは扱いやすい」です。「宅配の箱に入れやすい」とか「同じものが10鉢でも20鉢でも揃う」という話も耳にします。そして何よりこのクリスタルホワイトは長持ちします。開店祝いでコチョウランが並ぶと、最後まで咲いているのが当園の花です。そんな点が花屋さんにうけているのでしょうか。

ドライバーは父と私

市場への荷物は、父と私が交代で運んでいます。日中、出荷の準備をして、夕方積み込み、その後トラックを

走らせ荷物を降ろして、帰りは23時です。市場での荷物降ろしの際に、番号の入ったステッカーを貼ってもらう（既に相対取引で販売されている印）と、「今日、頑張って車を走らせてきて良かったなあ」と思います。

世間的には「ドライバーを雇って、自分達は本業に打ち込んだ方がいいのでは？」と言われるそうですが、自分達で市場に行くことに意味があると考えています。市場に行けば他の生産者の商品が見られます。流行りは何か、新しい品種はないか、出荷量はどのくらいなのか、いろいろと見て感じることができます。また、市場の担当者や買い付けに来ている花屋との話も出来ます。相手側の要望を聞いたり新しい品種を売り込んだり出来ます。市場にはいろいろな情報があり、自分達の今後の動きを考えさせられます。

今年、サマーセミナーに参加しました。今年のテーマは「変貌する売場（ナマ）の声を聞け」でした。そこで強く感じたことは、生産者と花屋のコミュニケーションです。私にとって、市場が花屋とのよいコミュニケーションの場になっています。

忘れられない注文

今年の2月にこんな注文がありました。市場を通してよく買ってきて下さっている花屋さんからの注文で、ある雪深い温泉町にコチョウラン120鉢を届けて欲しいと依頼がありました。用途は町の偉い方が亡くなったので、町ぐるみでの葬儀に供えるとのこと。2月の



写真3 自慢の愛車 今日も稼ぐぜ！



写真4 荷室の様子

相場の安い時期に大量の注文が入ったのです。こんなうれしいことはありません。

ただし不安もありました。乗用車でも行ったことのない町に、しかもトラックで、しかも、おそらく雪道。更には、120鉢とは自社用トラックでちょうど満載の数量です。そこに、苗物を少々混載するというのです。場合によっては車2台で行くことになるかもしれません。積み込んでみるまではわからないのです。不安を抱えながらも、得意先からの注文でしたので引き受けました。

納品時刻の指定もあって、早朝5時の凍えるような寒さの中で積み込みを開始しました。前日に受け取った苗物をまず先に載せ、四苦八苦しながら、全ての荷物を積み込むことが出来、早速出発しました。全行程で250km。残り50kmから雪が降り始め、残り10kmの山道は猛吹雪。更に進めば風が強まり地吹雪が起きて視界が1m程。登り坂でしたので、車を止めてしまえば再発進不可能という状況の中、ようやく目的地に到着しました。

現地は零下10℃、フロントガラスが凍り付いていました。そんな寒さの中でも、断熱+暖房の効いた荷室内はコチョウランにとって最適な20℃前後を保っていました。幸い、荷降ろしに苦勞する事無く、多くの現地スタッフの手伝いのもと、寒さに当てることもありませんでした。聞けば、今年一番の大雪のだそうで、現地の人でも困り果てていました。私にとって一生忘れられない仕事のひとつです。

このような注文は、①商品に信頼がおけること、②運ぶ手段を持っていること、この二点をクリアした生産者に回せるのだと思いました。花業界専門の運送業者にコチョウラン120鉢+苗物少々を積載する、冷暖房付きの4トントラックはありません。トラック2台

か大型1台では運賃が高価になってしまいます。当園のトラックについてよく知っていた花屋さんとのコミュニケーションが生んだ注文だったといえます。

「コチョウランは長持ち」のイメージ回復

私には花業界の相場の変動はコチョウランについてしかわかりませんが、景気のいい話はほとんど聞こえてきません。世間の景気が悪いから価格が下がる、売れないから価格を下げる。この流れは現在も止められません。

コチョウランについては、供給過多が原因で値崩れしています。市況が安いからコストをかけずに三流品を作ってしまう、そのような粗悪品が流通するからさらに輪をかけて価格が下がる悪循環を感じています。

数年前までは「コチョウランって長持ちだよ。値段が高くても2ヶ月間は平気で咲いているから安い買い物だよ」、そんな消費者の声をよく聞きました。しかし、現在の粗悪品は手間が掛けられていないために、花が長持ちせず、すぐに萎れてしまいます。「コチョウランは値段が高い上に全然もたない」、こんなイメージに変わりつつあるようです。

私が目指すことは、第一に粗悪品を作らないこと。見た目の派手さよりも、花が長持ちで丈夫であること。クレームの無い安定した商品を作ること。第二にコチョウランの正しい管理方法を花屋や消費者に広め、コチョウランはとてもし長持ちというイメージを回復させること。第三に花業界の消費拡大への活動。身近なところでは消費者の訪れる品評会への参加と考えています。

これらの活動は簡単なことではありませんが、長い目で見たときの自分達の将来と業界の将来を考え地道に努力しなければならないと考えています。

信頼されるユリ農家を目指して

土佐市花卉農業協同組合

土 居 智 博

経営の概要

私は高知県高知市の春野町で、オリエンタル系ユリ（OT系含む）、LA系ユリ、そして水稻を栽培しています。ここ春野町は高知県の中心部に位置し、目の前には太平洋をのぞむ、日照量の多い温暖な気候の土地で、キュウリなどの施設園芸の盛んな地区です。

現在の経営は、父を主軸として、母、私、妻の四人で行っており、夏場は水稻を作り、秋から初夏までユリの栽培を行っています。現在の栽培面積は、水田60a、施設40a（AP30型ハウス10aが2棟、AP30型ハウス17a、SRH型ハウス3a）になり、施設では年間で2～3回植え替えを行い、LA系ユリを

3万～4万本、オリエンタル系ユリを13万～14万本栽培しています。

我が家の施設園芸の歴史は、昭和35年頃より、祖父の代から始まります。当時、施設の面積は10aで、竹幌施設によるキュウリの栽培、昭和40年には木造合掌ハウスに。その後、経営は父に代わり、昭和50年の構造改善事業により施設の面積は50aのAP型ハウス、SRH型ハウスになり、キュウリ、ナスを栽培します。昭和63年に野菜の栽培をやめ、鉄砲ユリの栽培を開始。平成15年、16年にはAP型ハウスの老朽化により、AP30型ハウスへと建て替え、現在に至ります。

現在出荷している土佐市花卉農業協同組合（以下、土佐市花卉農協）への加入については、当時、地元の



写真1 ハウス全景

J A高知春野にユリの花卉部会が無かったため、春野町の隣にある土佐市のユリ切り花専門農協である土佐市花卉農協へ加入しました。

土佐市花卉農協のある土佐市管内はユリの生産農家が多く、カサブランカで有名なJ A土佐市高石支所をはじめ、戸波、波介、新居など数多くのユリの部会があり、冬から春にかけての市場における一大産地です。

はじめに

私は小さい頃からハウスの中で遊び、トラクターやコンバイン等に乗せてもらったり、楽しそうに仕事をする父母の背中を見て育ってきました。そのせいか、農業に対する違和感もあまりなく、姉と妹に挟まれた長男に生まれた事もあり、「将来的にはやらないといけないのかな」くらいには思っていました。

そこで地元の農業高校に進み、千葉大学園芸学部園芸別科花卉専攻に入学しました。なぜかという、父が園芸別科の野菜専攻を卒業していたこともあり、話などを聞くうちに行きたくなったのと、周りの卒業生からも、実践的な農家を目指すなら別科がいいとの事だったので入学を決意しました。入学してみると内容の濃い授業に実践的な実習、そして出会った仲間達、本当に多くのことを学ばせていただきました。そして、別科花組を修了し、実家に帰り就農に至ります。

就農から現在まで

実家では、家の農業の手伝いからスタートしました。この頃は鉄砲ユリをメインにした作型でした。鉄砲ユリの作型は球根の入っている箱や切り花を入れた出荷箱が重たく、球根の冷蔵処理なども自宅でやっていたためかなりの重労働でした。この頃から母の腰痛が悪化してきた事もあり、少しずつオリエンタル系ユリを増やしていきました。

就農一年目は球根の事などまったくわからず、父がすべてをこなしており、指示がないと何もできない状態でした。この頃思ったのが、学校の実習は当時、しんどい！ と思っていましたが、今考えてみれば楽をさせてもらっていたのだなと痛感しました。

二年目以降は、鉄砲ユリを栽培のベースにしつつ、オリエンタル系ユリの球根の発注、切り花の選別、調整、箱詰めなどを任されるようになり、少しは生産者らしくなったような気がします。ほかにも、市場の視察、他の生産者の圃場見学など、いろいろな人との出会いがあり、人の顔と名前を覚える時期だったように思い



写真2 芽出し処理



写真3 定植中

ます。この頃から別科の実習で習ったように、栽培状況などをノートにつけるようになり、わからないことがあった時は見直すようにしています。

就農三年目、別科花組で同級生だった妻と結婚。農業を手伝ってもらえるようになり、もっと頑張っていこうと自覚するようになりました。その後、母が腰椎間板ヘルニアになり、入院、手術。この翌年くらいから徐々に鉄砲ユリを減らしてオリエンタル系ユリ主体の栽培に変わっていき、就農九年目現在は、オリエンタル系ユリ、L A系ユリの栽培を行っています。

ユリの栽培について

ユリの球根には鉄砲ユリなどに代表される国産球と、オリエンタル系ユリ、L A系ユリなどに多く用いられるオランダ産球根、そして、南半球（ニュージーランド、チリ）産球根に分類されます。

国産球の鉄砲ユリの球根については、鹿児島県の沖永良部島で作られている“ひのもと”が大半を占めています。しかし近年では種子から栽培する新鉄砲ユリがあり、オランダでも鉄砲ユリの球根をオランダ鉄砲ユリとして作られるようになってきています。ちなみにオリエンタル系ユリでも国産球はありますが、オランダ産の小さい球根を日本で養成したものです。

オランダ産、南半球産球根に関しては主にオリエンタル系ユリ、L A系ユリで使用される輸入球根です。オランダ産の輸入開始は1月からで、南半球産は10月頃からの輸入になります。

高知での作型だと夏の植え付けになるので、オランダ産の球根を球根会社で冷凍保存しておいたものを解凍、芽出し、順化处理をしたのち定植します。品種にもよりますが、オリエンタル系ユリで解凍から3～4ヶ月程度で収穫になります。L A系ユリは2～3ヶ月程度で収穫になります。

この作型で使用する球根はかなり冷凍期間が長いため冷凍障害が発生するリスクが高くなります。冷凍障害とは長期冷凍によって起こる現象で、ブラックノーズ（芽無し）、花蕾数の減少、奇形花の発生、球根のカビ、腐敗などが発生します。そこで、冷凍障害の出にくい品種を選定し、カビや腐敗球の除去、芽出し処理を行いブラックノーズの除去を行います。なお栽培を開始する時期の8～9月は気温が高いため暑さに強い品種の選定を行う必要もあります。

10月になると南半球産の球根が輸入されてくるので、そちらを利用するようになります。収穫が最も多くなる時期は厳寒期が中心です。

オリエンタル系ユリは、鉄砲ユリやL A系ユリと比較して生育適温が高めになるので、二重被覆を行い、重油ボイラーを使用し加温を行います。しかし近年では、重油代が高騰しており、コストの削減をするため、三重被覆の導入やヒートポンプの設置も検討中です。

選別については、鉄砲ユリ部会では共販なので取り決めがあるのですが、オリエンタル系ユリ、L A系ユリに関しては個選個販なので各々が選別をし、好きな市場へ送ることができます。私は大阪、京都を中心とした出荷で、あとは名古屋、東京にも少し送っています。

出荷の方法については、L A系ユリで10本、オリエンタル系ユリは5本で一束にしてスリーブに入れます。その後水揚げをしたのち箱へ入れ、運送中に動かないように足元をガムテープで固定し、梱包、出荷になります。一箱あたりの入り数は、L A系ユリで40～50本、オリエンタル系ユリで20本（カサブランカ等の横向くタイプやボリユームの大きいタイプだと10～15本）です。

現在、我が家のオリエンタル系ユリの主軸となっている品種は“シベリア”です。カサブランカは横を向くのに対し、枝打ちが上向きで、少しコンパクトなタイプの白色のユリで、葬儀、婚礼、花束等、多用途に使われる品種です。次に多いのが“ティアラ”という品種で、花色はピンクで花粉の出ないものです。ただし、長期冷凍に強くないので南半球産の使用からに限られます。他にも様々な品種を作っていますが、毎年変化していくため、すべて書いていたら書ききれないので省略します。

市場でのオリエンタル系ユリの取り扱い、カサブランカ、シベリア、ソルボンヌの3品種が約7割以上を占める状況になっています。上記3品種は球根取扱量が多く、そのため花屋や仲卸業者は、年間を通じて生産量が豊富で、特性もよく分かっており、使い勝手が良いのでこの3品種を使用します。

毎年いろいろな新品種が出てきていますが、新品種は球根輸入量が少ないため、継続した出荷が難しく、また使用した事のない花は水揚げや開花の特性などが分からない等が考えられます。

しかし上記の3品種ばかりでは経営が単調になりやすく、また新品種も欲しい花屋もいます。新品種を栽培する場合は市場にサンプル品の提供を行って花屋や市場から感想を聞いたりします。生産する側も栽培しなければ特性も分からないので、少量を作付けし、特性を調べるようにしています。

最近では八重咲きタイプのユリも出てきているので取り組んでみたいとも思っています。

収穫が終了した初夏から真夏にかけてハウスの中を片付けた後、土壤の消毒を行います。少し前までは臭化メチルを使用してきましたのですが、オゾン層の破壊等から使用が禁止になり、近年では真夏の太陽光と暑さを利用したサウナ処理を行っています。

方法としては、栽培が終了した圃場にバーク堆肥やピートモス、ふすま（小麦の糠）等を散布し、トラクターによる混和、灌水後、土壤をマルチングし、ハウスを閉め切り、温度を上げます。現在、この消毒方法で問



写真4 新品種のユリ

題はないのですが、高品質なユリを栽培するため、土壌蒸気消毒機の導入も検討中です。

課題そして展望

課題としては、現在経営の主体が父なので将来的には経営移譲も進めて行くようにする事。また、組合などでは若干活動が少なくなっているため、市場や花屋、球根会社、地元産地、県外産地の視察を行い、意見や情報交換などを活発にしていきたい。現在の出荷形態が個販なので選別が各々違うので目慣らしを今まで以上に行い、等階級、選別を合わせるようにし、市場における信頼を得るようにしていきたい、と思っています。

昔は輸入球が少なかったため、作れば売れる時代で



写真5 八重咲きのユリ

したが、現在は球根輸入量、そして生産する産地や輸入切り花も増え、淘汰される時期になってきています。これからはいかに高品質なユリを作るかを生産者も勉強、努力をして、消費者や市場関係者に「この花やないといかん！」と毎回使用してもらえるよう継続出荷を行い、中身を見ればその人の顔が浮かぶような、この先何十年と続く信頼されるユリ農家を目指していきたいと思います。

最後に一言

ユリを栽培することも大切ですが、やはり夫婦が仲良く、楽しんで経営していくことが一番だと思います。父と母をお手本にし、私たち夫婦も頑張っていきたいです。

◆ トピックス

吉池貞蔵氏 バラコンテストで金賞受賞

吉池氏といえど何と云ってもリンドウである。現岩手のリンドウを育成、産地をつくられた立役者である。バラの吉池氏と聞いて不思議に思われるかもしれない。じつは現在、吉池氏が最も入れ込んでおられるのはバラである。学生の頃からバラに興味をもち、リンドウの仕事をしながらもバラへの想いを持ち続けていたようである。

現職を退職後、バラの品種改良を自宅の庭（圃場）で始められた。育成された品種を私の職場の地元、花フェスタ記念公園で開催されている「ぎふ国際ローズコンテスト」（私が審査委員長）に初めて出品、2007年に銀賞を受賞された（品種名ファミリー）。このコンテストは1998年から開催されているガーデンローズのコンテストで、耐病性、花付き、開花期間などを重視するものである。後にこの品種は可見市の市の花（市の花はバラであるが品種を特定していなかった）にも選定された。

そして2010年は、国営越後丘陵公園で開催された「国際香りのばら新品種コンクール」で見事、金賞でトップ、

国土交通大臣賞を受賞された。並み居るプロの育種家（長年、バラの育種に携わってきている企業育種家など）を抑えての受賞である。このコンクールは世界で唯一の香りに重点をおいたもので、実際の審査にあたって、100点満点中、香りの評価に30点を割り振っている。品種名「真宙（まそら）」はお孫さんの名前だそうだ。

私はこのコンクールでも審査委員長をしており、今春の表彰式には賞状を授与させていただくとともに、表彰式後に吉池氏と対談もさせていただいた。副審査委員長は日本を代表する香りの専門家、中村祥二氏（国際香りと文化の会会長、資生堂研究所 香料顧問）である。本品種の中村氏による香りのタイプは、「フルーティ、ティーの香りにフレッシュなオレンジ果皮よりの酸味がある。女性らしい甘さと親しみやすい清潔感がある。調和がよい」と表現されている。

以上のように、吉池氏は今、一番脂の乗り切った本物のバラ育種家である。

（報告：上田善弘）

100 年前の松戸と園芸学部

横井政人

昨年 10 月から 1 ヶ月間、園芸学部の前身 千葉県立園芸専門学校創設 100 周年を回顧して記念事業が盛大に行われました（花葉 2009 号掲載）。

学校の設立場所は戸定が丘の徳川家水戸邸に隣接しています（図 1）。この場所はもともとは松戸松龍寺の所有地でした。この地は松戸宝光院の栗山明高住職によりますと、小山から戸定が丘一帯の地主でありました松龍寺が、慶応 3（1867）年、政権の王政復古により寺の土地を国に寄贈することになり、ここを水戸徳川家（昭武公）が明治 17（1884）年に購入、戸定館を建設しました。初めこの水戸邸の土地を県立松戸中学校、私立松戸中学校が購入使用しましたが経営難で放棄、ここを県立園芸学校が購入することになりました。

ここでは園芸学部前身の園芸学校創立当時（明治 42（1909）年）の松戸の雰囲気をご地図 1、古地図 2 から感じてみたいと思います。

図 1 は千葉県立園芸専門学校設立 5 年後、大正 3（1914）年に千葉県立高等園芸学校と改称した頃の図で、徳川家水戸邸に隣接して示されています。今から 96 年前の地図になります。恐らく園芸学部が地図に書かれた最初のものと思われる。水戸邸のすぐ北側に元地主の松龍寺があります。今の角町は角丁になっています。ご覧のように常磐線の松戸駅が見られます。駅は明治 29（1896）年に開設されました。ただ松戸ま

で電化したのは昭和 11（1936）年ですので、故小杉清教授が卒業なさるまでは煙をはく列車だったわけですね。細い水戸街道の家並みには現在も営業中の関宿屋があります。学内では大正 4（1915）年に講堂が落成、現在大木になったヒマラヤスギもこの年に植えられました。他の大木のユリノキやトゲナシニセアカシアはもっと古く明治 43（1910）年にサンクガーデンに植えられています。

図 2 は松井天山による昭和 5（1930）年松戸写生図で、千葉高等園芸学校は描かれていますが、当時、戸定邸は非公開のためか山林になっています（右上）。この図には工学部前身の陸軍工兵学校が見られます。当時の常磐線は図のように市内で湾曲しています。駅の南側に見える赤松林は現在まったくありませんし、園芸学部構内には故安藤先生によると 200 本以上もあったという赤松は現在 2、3 本（？）しかありません。私の学生時代（昭和 29 年卒 -1954）でも東側は家並みがなく園芸学部までは蛙の音がうるさい田んぼ道でした。現在の聖徳大学近辺の丘には全山が山百合で溢れすばらしいものでした。今でも町なかには僅かですが歴史的な金町コカブ栽培が見られます。

まだまだ話題はつきませんが、松戸移転を止めた園芸学部にとって、以上の地図はますます貴重な資料となるに違いありません。

図 2
松井天山による
昭和 5（1930）年
松戸写生図

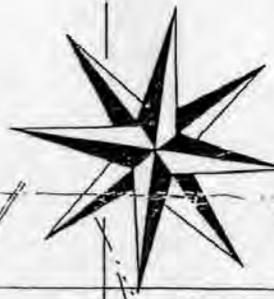


P42-43 図 1

大正 3 年（1914）に千葉県立高等園芸学校と改称した当時の古地図

町元内

川



至金所方面

至金所方面

高橋製粉場

松小學校

宮

高等園藝學校

千葉縣立

水戸邸
子爵橋本武定

家

松神社

松戸至

南

松葉

江



平

浮

明村

松葉常

線

至水戸方面

花葉会が千葉大学に八重桜の苗木を寄贈した経緯

花葉会会長

安藤敏夫

千葉大学環境健康フィールド科学教育研究センター（千葉県柏市柏の葉6-2-1）が計画した「柏の葉八重桜並木」の整備を支援するために、花葉会は109品種169本の八重桜の苗木を寄贈したが、ここにその経緯を書きとめ、花葉会会員の善意に応えたいと思う。そのためには、少し長くなるが、平成15年前後の園芸学部の激動期の話から始めなければならない。

環境健康フィールド科学教育研究センター（現在は環境健康フィールド科学センター、以下センター）は、園芸学部附属農場を転換して平成15年4月に開設した学内共同利用施設である。農業が米麦など「国民のエネルギー源」を賄うのに対して、園芸は果物・野菜・草花という「国民の体と心の健康源」を賄う産業である。このように、もとより園芸は健康産業なのだが、それを植物の専門家だけで担ってきた点に限界がある、と小生は考えてきた。園芸のもつ健康資源（ほ場・産物・作業）を、植物の専門家（園芸学）と人間の専門家（医学・薬学・看護学・教育学）との連携によって科学し、健康という視点から、広い意味での環境を整え、整えられた環境を健康増進に活かすための新たな学術＝環境健康科学を推進するためにセンターは設置されたのである。こうしてこのセンターは、人間の専門家も取り込んだ次世代の園芸を標榜する組織、しかも世界唯一の組織となったのである。これは農学部ではなく、園芸学部であるからこそ成しえたものであり、園芸学部の面目躍如たるものがある。

小生は平成14年4月から平成15年3月まで千葉大学園芸学部附属農場の最後の農場長を務めた。引き続き同年4月から2年間、副センター長を務めた後（センター長は古在豊樹）、平成17年4月から平成19年3月まで第2代のセンター長を務めた。農場長として小生は、センターの開設に先立つ概念形成から概算要求までの全てのプロセスを経験することとなった。当時、助手であった渡辺均と國分尚の不眠不休の活躍なしに

この大事業は成し遂げられなかった。折しも「つくばエクスプレス」が開業（平成17年8月）し、期せずしてセンターは「柏の葉キャンパス」駅から徒歩5分の一等地に立地することとなった。センターと同駅の間には大きな商業施設（ララポート・三井不動産）が誘致され、高層マンション群も林立して、「柏の葉キャンパス」駅周辺は、秋葉原まで20分という、交通至便な新都市に生まれ変わってしまった。そのため、センター内の園芸系教員は、都市に隣接して存在し、都市機能を高める働きも担う新たな園芸＝都市園芸に傾注することとなった。

小生が農場長の時代に、非公式ではあるが柏市から「センターを貫通するバス通り」の設置をお願いできないか、という打診があった。柏の葉キャンパス駅から西に延びる大通りは、センターの正門で行き止まりになっていた（以下、駅前通り）。センターの中央を東西に横断する大通りを設置して、駅前通りを延長することができれば「柏の葉キャンパス」駅へのアクセスは格段に向上するから、行政としては当然の希望である。だがそれは、附属農場の3分の1の敷地を東京大学に奪われることとなった千葉大学には到底容認できない要求であった。行政との不和を恐れる立場として板挟みとなった小生は、ソフトランディングを願ってあれこれ思案を巡らした。その結果誕生したのが「柏の葉八重桜並木」構想である。

センターを東西に横断する道の長さは、八重桜で有名な大阪造幣局の通り抜けより僅かに長い。これに駅前通りを加えて八重桜の並木を整備すれば、日本一の八重桜の並木にできると、柏市や「柏の葉キャンパス」駅周辺を開発する三井不動産に、何回も何回も主張した。繰り返して主張すれば通じるもので、そのうち駅前通りからセンターを横断して西に通じる桜並木の絵が入る都市計画図が散見されるようになり、やがてそれが定着し、日本一の八重桜並木を象徴として、愛さ

花葉会が千葉大学環境健康フィールド科学センターに寄贈した八重桜品種一覧

1	阿岸小菊桜	アギシコギクザクラ	平成21年4月	1
2	東錦	アズマニシキ	平成21年4月	1
3	天の川	アマノガワ	平成21年4月	2
4	有明	アリアケ	平成21年4月	1
5	市原虎の尾	イチハラトラノオ	平成21年4月	1
6	一葉	イチヨウ	平成21年4月	1
7	妹背	イモセ	平成21年4月	1
8	雨情枝垂	ウジョウシダレ	平成21年4月	1
9	大南殿	オオナデン	平成21年4月	1
10	思川	オモイガワ	平成21年4月	2
11	関川	カンザン	平成21年4月	2
12	祇王寺祇女桜	ギオウジギジョザクラ	平成21年4月	1
13	麒麟	キリン	平成21年4月	1
14	兼六園菊桜	ケンロクエンキクザクラ	平成21年4月	2
15	紅華	コウカ	平成21年4月	45
16	高台寺	コウダイジ	平成21年4月	1
17	極楽寺桜	ゴクラクジザクラ	平成21年4月	1
18	御座の間匂	ゴザノマニオイ	平成21年4月	1
19	五所桜	ゴショザクラ	平成21年4月	1
20	胡蝶	コチョウ	平成21年4月	1
21	笹賀鴛鴦桜	ササガオシドリザクラ	平成21年4月	1
22	里原	サトハラ	平成21年4月	1
23	塩釜桜	シオガマザクラ	平成21年4月	1
24	朱雀	シュジャク	平成21年4月	1
25	松月	ショウゲツ	平成21年4月	2
26	上匂	ジョウニオイ	平成21年4月	1
27	白妙	シロタエ	平成21年4月	2
28	白普賢	シロフゲン	平成21年4月	1
29	水晶	スイショウ	平成21年4月	1
30	千里香	センリコウ	平成21年4月	1
31	手弱女	タオヤメ	平成21年4月	2
32	奈良の八重桜	ナラノヤエザクラ	平成21年4月	1
33	梅護寺数珠掛桜	バイゴジユスカケザクラ	平成21年4月	1
34	花笠	ハナガサ	平成21年4月	2
35	日吉桜	ヒヨシザクラ	平成21年4月	1
36	鶴桜	ヒヨドリザクラ	平成21年4月	1
37	弘前三段咲	ヒロサキサンダンザキ	平成21年4月	1
38	福祿寿	フクロクジュ	平成21年4月	2
39	普賢象	フゲンゾウ	平成21年4月	2
40	紅笠	ベニガサ	平成21年4月	2
41	紅時雨	ベニシグレ	平成21年4月	2
42	紅豊	ベニユタカ	平成21年4月	1
43	ホクサイ	ホクサイ	平成21年4月	1
44	増山	マスマヤマ	平成21年4月	1
45	松前愛染	マツマエアイゼン	平成21年4月	1
46	松前薄重染井	マツマエウスガサネソメイ	平成21年4月	1
47	松前白牡丹	マツマエシロボタン	平成21年4月	1
48	御車返し	ミクルマガエシ	平成21年4月	2
49	八重紅大島	ヤエベニオオシマ	平成21年4月	2
50	八重紫桜	ヤエムラサキザクラ	平成21年4月	1
51	楊貴妃	ヨウキヒ	平成21年4月	2
52	蘭蘭	ランラン	平成21年4月	2
53	雨宿	アマヤドリ	平成22年4月	1
54	新珠	アラタマ	平成22年4月	1
55	早晩山	イツカヤマ	平成22年4月	1

56	系括	イトククリ	平成22年4月	1
57	伊予薄墨	イヨウスズミ	平成22年4月	1
58	鬱金	ウコン	平成22年4月	1
59	渦桜	ウズザクラ	平成22年4月	1
60	永源寺	エイゲンジ	平成22年4月	1
61	江戸	エド	平成22年4月	1
62	大沢桜	オオサワザクラ	平成22年4月	1
63	大提灯	オオチョウチン	平成22年4月	1
64	大村桜	オオムラザクラ	平成22年4月	1
65	御室有明	オムロアリアケ	平成22年4月	1
66	鎌足桜	カマタリザクラ	平成22年4月	1
67	菊桜	キクザクラ	平成22年4月	1
68	衣笠	キヌガサ	平成22年4月	1
69	気多の白菊桜	ケタノシロキクザクラ	平成22年4月	1
70	兼六園熊谷	ケンロクエンクマガイ	平成22年4月	1
71	御信桜	ゴシンザクラ	平成22年4月	1
72	琴平	コトヒラ	平成22年4月	1
73	木の花桜	コノハナザクラ	平成22年4月	1
74	笹部桜	ササベザクラ	平成22年4月	1
75	須磨浦普賢象	スマウラフゲンゾウ	平成22年4月	1
76	善正寺菊桜	ゼンショウジクザクラ	平成22年4月	1
77	仙台吉野	センダイヨシノ	平成22年4月	1
78	園里黄桜	ソノサトキザクラ	平成22年4月	1
79	泰山府君	タイザンフクン	平成22年4月	1
80	千原桜	チハラザクラ	平成22年4月	1
81	長州緋桜	チョウシュウヒザクラ	平成22年4月	1
82	突羽根	ツクバネ	平成22年4月	1
83	手毬	テマリ	平成22年4月	1
84	東京桜	トウキョウザクラ	平成22年4月	1
85	名島桜	ナジマザクラ	平成22年4月	1
86	二度桜	ニドザクラ	平成22年4月	1
87	白山旗桜	ハクサンハタザクラ	平成22年4月	1
88	萬里香	バンリコウ	平成22年4月	1
89	火打谷菊桜	ヒウチダニクザクラ	平成22年4月	1
90	ピンクパーフェクション	ピンクパーフェクション	平成22年4月	1
91	房桜	フサザクラ	平成22年4月	1
92	紅玉錦	ベニタマニシキ	平成22年4月	1
93	紅手毬	ベニテマリ	平成22年4月	1
94	箒桜	ホウキザクラ	平成22年4月	1
95	宝珠桜	ホウシュザクラ	平成22年4月	1
96	松前紅陽	マツマエヨウコウ	平成22年4月	1
97	松前花都	マツマエハナミヤコ	平成22年4月	1
98	松前紅珠恵	マツマエベニタマエ	平成22年4月	1
99	松前紅紫	マツマエベニムラサキ	平成22年4月	1
100	松前八重寿	マツマエヤエコトブキ	平成22年4月	1
101	三ヶ日桜	ミッカビザクラ	平成22年4月	1
102	八重紅虎の尾	ヤエベニトラノオ	平成22年4月	1
103	八重深山桜	ヤエミヤマザクラ	平成22年4月	1
104	御衣黄	ギョイコウ	平成22年4月	1
105	作並菊桜	サクナミキクザクラ	平成22年4月	1
106	松前	マツマエ	平成22年4月	1
107	来迎寺菊桜	ライコウジクザクラ	平成22年4月	1
108	静桜	シズカザクラ	平成22年11月	1
109	松前薄紅九重	マツマエウスベニコノエ	平成22年11月	1

合計 169 本

れる街づくりを進めることで地域の合意が形成されるようになっていった。それとともにセンター内にバス通りを通す構想は消え去り、柏市も八重桜並木の設置に積極的となってきて、小生の当初の目論見は達成されることとなった。

センター内の議決を経て、平成18年3月18日にセンターの事業企画書「柏の葉八重桜並木（仮称）の設置」を大学事務局に提出した。学内八重桜並木設置委員会の設置を経て、平成18年4月28日、千葉県、柏市、三井不動産、地域住民などの参画を願って「第一回柏の葉八重桜並木設置協議会」（以下、協議会）を開催し、小生はその会長を拝名することとなった。副会長に任命された千葉県県土整備部の斎藤威主幹は、それ以降、この計画の実施に欠かせないキーパーソンとして活躍することとなった。桜の専門家として財団法人日本花の会の田中秀明氏にも参画を願った。

当時、駅前通りにはカエデ類の並木を設置する実施計画があったが、第2回協議会（平成18年5月18日）では、これを八重桜の並木に変更して貰いたい旨の要望をとりまとめた。幸いこの要望が受け入れられて、その冬には駅前通りの南側＝ラポート側に「関山」と「一葉」の立派な八重桜並木が誕生し、平成19年4月21・22日には、ささやかながら協議会主催の「第1回柏の葉・里さくらまつり」を開催する運びとなった。専門的には「里桜」はサトザクラと発音するが、協議会では「里さくら」と濁らずに発音する約束とした。

「第2回柏の葉・里さくらまつり」（平成20年4月19・20日）を経ても、センター内に八重桜並木は整備できなかった。センター正門から西に延びる道を拡幅して「グリーンフィールド」とし、その両脇に八重桜並木を設置する計画としたが、グリーンフィールドには果樹園の一部が含まれることもあって、平成22年秋に至ってもまだ基盤整備は終わっていない。大学財政に余裕のないことも大いに影響している。

平成20年度第7回花葉会幹事会（平成21年1月24日）に於いて、センターに於ける八重桜並木の整備を支援する目的で、必要本数の八重桜の苗木を購入・寄

贈するための資金の拠出を願い出たところ、必要満額を花葉会基金から出動することで幹事一同の賛同が得られた。千葉大学園芸学部創立100周年を迎えようとしている折、100周年を祝する100品種の八重桜の確保がこうしてできたのである。

「第3回柏の葉・里さくらまつり」（平成21年4月18・19日）の当日、センターのシーズホールに於いて、メディアを含んだ市民の前で、花葉会と柏の葉八重桜並木整備協議会（改名）の連名で小生から、表に記した最初の52品種112本の八重桜苗木をセンターに寄贈することができた（センター長は高垣美智子）。なお植栽効果を高めるために「紅華」の本数を増やしてある。財団法人日本花の会から購入したこれらの苗木は、平成22年10月現在でもほ場に借り植えされている。

残りの品種は日本花の会への注文生産とし、生産された新たな55品種55本は「第4回柏の葉・里さくらまつり」（平成22年4月17・18日）の席上で同様にセンターに寄贈された（センター長は高垣美智子）。こうして花葉会の基金から捻出された資金をもとに、ともに小生が会長を拝名する花葉会と「柏の葉八重桜並木整備協議会」から、センターに合計107品種、167本の八重桜の苗木が寄贈されたのである。これを契機に小生は「柏の葉八重桜並木整備協議会」の会長を辞し、次の会長として高垣美智子センター長が就任した。なお、繁殖できなかった2品種2本は平成22年11月に追加寄贈される予定である。

平成21年10月29日には千葉大学園芸学部創立100周年記念式典が執り行われたが、柏の葉地区に馴染みのない先輩が多いこともあって、センターの八重桜並木の整備が記念事業に取り込まれることはなかった。したがって、センターの八重桜並木の整備に必要な八重桜の苗木は、現在に至るまで全て花葉会会員が蓄えた浄財によってのみ賄われているという事実を明らかにし、それが千葉大学園芸学部の100周年を祝う花葉会会員の心であり、いずれ花葉会の誇りとなるであろうことを記して、花葉会会員一同に深く感謝の意を表するものである。

飯塚先生との思い出いろいろ

飯塚宗夫先生が本年4月にお亡くなりになりました。大正11(1922)年、長野伊那市生れの88歳、米寿の年でありました。先生は本学には昭和48(1973)年に農林省果樹試験場から文部省千葉大学園芸学部農場教授として来校され、その後、園芸学部育種学研究室教授になられ、昭和62(1987)年に65歳で停年退職されました。退職後、浜松市フラワーパーク園長、タキイ種苗研究農場技術顧問をされておりました。

先生は、千葉高等園芸学校で穂坂八郎先生の花弁研究室で花卉専攻をされ、昭和15(1940)年卒業後、京都帝国大学農林生物学科で育種学を専攻。この後4年間は軍隊で少尉までになり、終戦を迎えました。

先生の研究は、園芸作物を材料とし、植物遺伝学、育種学的視野での基礎から実用的なものまで幅広く、国際的にも著名な多くの成果があります。自家不和合性植物、特に大根や白菜などのアブラナ科植物の内婚弱勢、自家不稔性、F1育種。その他、ハウレンソウ、ブドウ、ユリなど、多くの野菜や果樹、花卉の育種を行ない、昭和44年には日本育種学会賞を受賞されています。また米国やメキシコのチャビンゴ大学に長期滞在中。特に熱帯園芸作物の起源と進化に関心をもたれ、中南米、東南アジア諸国に現地調査を行い、数多くの新野菜や花卉類を導入されました。

私が先生とお付き合いさせていただいたのは、先生が

農場に着任されてからです。特に、1975年、「中南米の園芸植物の探索と導入」というテーマでの研究視察に行かないかとお誘いを受けた時から始まります。メキシコを中心に中南米14カ国、3ヶ月間、三位正洋先生や渡辺重吉郎助手も一緒しました。

先生のご性格は非常にまじめで厳しく、私には大変な時もありました。例えば、熱帯の広大な果樹園に入りますと、朝早くから午後まで果樹一本一本の花実を記録されるのでした。果樹だけの清耕園では野生植物はまったく見られず、暑い園では耐久力が必要でした。今、先生の履歴を拝見すると戦中は少尉であったということ。これが先生の強烈な「耐える」「粘る」力のもとであったと考えられますが、戦争経験がない私には驚きでした。

メキシコ旅行中、日本でも普及した帝王ダリアを初めて見たときはびっくりしました。また赤いダリアや赤いサルビア、いずれも種小名は緋赤という意味のコクシネアが印象的でした。さらに見渡す限りの高い柱サボテン林には威圧されました。

私にとって、故人の植物研究など、多面のご指導・ご鞭撻は80歳になった今日でも私の頭から抜けない不思議な魅力があると感じております。先生のご冥福をお祈りいたします。

千葉大学園芸学部名誉教授 横井政人

飯塚先生との思い出

先生との出会いは、三十数年前の学生時代、花卉研の仲間に誘われ農場にあった先生の研究室をのぞいた時に始まります。自由度の高いとても不思議な空気を持つ部屋でした。私は全く勉強をしない学生であったため、見かねた先生はあの眼鏡越しのポーズで「文献のひとつづつ読んでおけや」と言われ、与えられたのが『カボチャ野生種の分布と分類』に関する文献でした。それは非常に興味をそそるもので、あの文献からあの時に学ばせて頂いた「育種のもととは野生種の把握と分類にある」という考えが、今日まで私が曲がりなりにも育種をやってこれた基盤となっています。ただの一つの文献でその後の道の全てを示して頂いた慧眼に全く頭が下がります。



興味ある植物を見つけカメラを構える飯塚先生
(1990年頃)

育種の現場を大事にされる先生はタキイ農場にもよく視察に来られ、「軍隊式のタキイ」を上回る気力に満

ち溢れた姿を常に示されたため、野菜も花も我々ブリーダーは育種意欲をおおいに鼓舞されました。先生からインスピレーションを受けたブリーダーも多かったと思います。今、タキイには千葉大で先生と接点のあった卒業生が、会社の要所々々でプライドを持って仕事に励んでいます。

先生の育種志向はどうも生来のようです。三年程後に後輩の須江君と藤沢のご自宅に伺わせて頂いた折には、ご高齢にも関わらず庭先のプランターで観賞用ダイコンを育種されており、「ダイコンは発生遺伝学のおもしろいよ」と熱心に話されていたことが思い起こされます。その際、藤沢の駅前の花屋さんでヒマワリの花束をあつらえお持ちしましたが、「随分ヒマワリはヒットしたらしいね。よかったね」と大変喜んで頂きました。ダメ学生も少しは先生の教えに報いることができたのかと安堵したものです。

当時の千葉大農場には、飯塚先生が横井、渡辺両先生とともにメキシコで収集されたサルビア・コクシネアがありましたが、折しも今年このサルビアでタキイは新品種を発表することになりました。これが先生に対するひとつの恩返しになればと思っています。

先生から教えを頂いたたくさんの皆様と一緒に改めて先生に感謝し、ここに深くご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

タキイ種苗(株) 羽毛田智明(園芸 S53 年卒)

変貌する売場の声を聞け ～販売の最前線に花生産の転機をつかむ～

サカタテクノサービス

久保田 芳久

今回のサマーセミナーから、会場が東京都内から千葉大学本校の西千葉キャンパスに変更されました。年配の卒業生には信じられないくらい樹木が茂り、建物が増え、キャンパスの外には様々な店もでき、懐かしさと時の経過と真新しさが交錯する光景です。その木立の中、静かにたたずむ建物、けやき会館を会場に開かれました。

6月26日(土)

オープニング挨拶

花葉会会長 千葉大学大学院園芸学研究科教授 安藤敏夫

27年目となったこのセミナーは生産者、生産指導者の情報交換の場です。その中で最も遠い売場の声を聞いてほしい。8名の演者の若い人の感性を元に、時代を切り開いてほしい。花産業全体で連絡を取り合うべきです。よいものを得て帰ってください。

関西で園芸専門店を営むということ

～園芸店としてこれまでしてきたこと、これからするべきこと～

株式会社 陽春園 副社長 野里元哉氏

兵庫県宝塚市山本。有名な、歴史ある園芸産地の中の代表格の優良園芸店です。海外留学、海外見学の経験豊富な若い副社長に登壇願いました。



山本は300軒ほどの植木業者があり、珍しい植物の通信販売も栄えた歴史があります。時代は変わり、造園屋として営業が増える中、陽春園は早くからアメリカのDIY方式に切り替えました。敷地は1000坪、顧客の90%は車で来ます。

各論は丁寧に進められ、ハボタン、パンジー・ビオラ、

コチョウラン、クリスマスローズ、他。屋外売り場や室内売り場の工夫、色の使い方など画像で紹介されました。売れるものは車に乗るサイズです。

春のピークは4～5月。8月は少なく、その後が年末商戦。1～2月はクリスマスローズ。4月がガーデニングシーズンの本番ではなくなっており、5月、6月に売る努力が必要。秋は残暑後に努力を。シーズンが変化しています。

全国的に30代後半の世代が手に取る雑誌は趣味園や園芸ガイドでない。ナチュラルガーデンやインテリアの雑誌。インテリアとして植物を捉える人に見てもらえる、雑貨のような提案と動きをしています。

野菜苗を取り入れる生産者が多くなっていますが、必要な選択と考えます。売り場の対応としては野菜の知識を増やしていかなければなりません。

『無理して売るな!』のモットーが固定客を引きつける
～「多様な視点から攻める」と語る 個性派社長の暴言、放言～

株式会社ろくなん本店 代表取締役社長 石川英生氏

ろくなん本店のある静岡県藤枝市は、力のある3軒の園芸店がそれぞれ個性を持ち、競い合



い、内容が濃くなっています。近隣の都市、静岡市からも固定客がやってきます。ホームセンターが進出できない街です。

社長は個性溢れるキャラクターで、アクション映画にも出てきそうな体格と風貌にスキンヘッド(失礼)。恐もて風の講演はやはり大きな声に大きな身振り。

今のポット苗の価格は農家に厳しすぎると捉え、「売れないものを無理して売るからダメなんだ。仕入れてあげてただでなく0円にして渡せばいい。トレーごと

渡せば近所にも配り、よく花が咲けば、また来てくれる。家の客になるか？…そんな事は気にしない」。

大鉢で切ったような話の進め方ですが、トマト苗なら膨大な品種数を揃えるなど、種苗店出身の強みも生かし、きめ細かい店舗演出もしています。また固定客の重要性を説き、売るものは正当な単価をつけます。農家の取り分は再生産に必要です。「日本の技術は最高だ。あんなシクラメンの世界が何処にある。売れないでなく、どう売るかだ」。会場を圧倒し通した50分でした。

若き仕事師の感性と観察力が支える地域一番店

～売れ筋から見える時代の変化 仕入れの変化は…～

ガーデングーデン株式会社浜名湖西店マネージャー 宮本直樹氏

店舗 4000 坪、
駐車場 250 台規模で、社員 17 名、
パート 80 名を
雇用。来客数年間 40 万人、植物
60%、資材 40%
の売り上げ比率
です。



この大きな店の企画と行動は多彩で、紹介しているだけでも時間が足りません。「ガーデングーデンがすごい」というチラシ作成、ポイント会員約 30,000 人、60 歳以上のピンテージ会員、幼稚園・小学校での花育、イベント情報・講習会・ツアーを企画するバラ会員、週に 2 回の素人オークション、病害虫クリニック・洋蘭・ブルーベリー・芝張りなど各種講習会、生産者さんによる講習会、生産者店頭卸売会、ペット同伴推進店。常に何かやっっているようです。

花だけ売っているのではない。1 時間以上かけて 50 km 以上離れた所から来るお客様もいます。商品を決めて来る人はなく、たくさんの中から選び抜いて、購入していきます。多くの花を見て癒され、その空間を満喫し、気に入った花を購入する。販売しているのは花ですが、お店のディスプレイ、ポップ、雰囲気、商品知識、品揃え、人間味、センス、アイデア、接客など、物ではないものも販売している事を忘れてはならないのです。

ホームセンターの集客力を利用せよ！

～HC の隣でがんばる老舗種苗店の若き 3 代目の自然体な販売戦略とは～

有限会社カワシマ種苗 園芸部店長 川嶋一正氏

滋賀県近江八幡市の種苗店 3 代目。名古屋の大手ガー



デンセンター(株)サンリョウで 8 年修行しました。その店長時代は革新的で今でも有名です。

販売現場に
立った川嶋氏は

客からの質問を謙虚に聞き、それを店頭でどう生かすかに注力しました。名称、特性、扱いなどを聞き、調べる。こだわって売ってゆくうち、意にそぐわぬ品が入る事が多くなり、仕入れに廻らせてもらいました。市場から生産者を紹介してもらい、見に行くと、その作りのこだわりに感動し、そのこだわりを店頭に出しました。14 ヶ月シクラメンなど。そしてそれを女性従業員にもその気持ちを共有してもらうため、生産現場につれて行くのです。ポップと人が調和してゆきます。これは生産者の意識も高め、さらに数々の提案が寄せられます。

滋賀に帰って園芸店を営むにあたり、従業員教育は、感動の共有です。固定客が毎年増えてゆきますが、その丁寧な説明と商品管理は、裏づけがあり、気持ちがこめられたものなのです。隣の敷地のホームセンターが一般客を呼び、川嶋種苗店の固定客となってゆくのです。売り上げはここ 3 年、確実に伸びています。

総合討論一日目

コーディネーター：福永哲也

演者代表：宮本直樹氏、川嶋一正氏

アドバイザー：安藤敏夫

会場から質問票を回収し、それに則って話が進められていきました。

「生産小売業」に関して、話が始まります。生産段階からのプロデュースが必要で 10 年先のキーワードと結論します。進化が要るのです。創意工夫には、きれいな、仕立てがよいには惹かれるが、生産者の作る思いがあるものがが必要です。都会の宮本氏、地方の川嶋氏で、顧客の年齢などが異なり、それぞれの対応と目標があるようでした。

また東京都議会議員の山下幹事から、「オフィスグリーン条例」の発案、経緯などについて説明がなされました。東京都では 700 万人が働き、300 万人がオフィスで働きます。東京から始め、全国に広められればと期待が集まります。

6月27日(日)

「オープニング」二日目

花葉会幹事長 FAJ取締役 長岡求

市場の売り上げは落ちています。市場外流通が拡大しましたが、ホームセンターの10年後、20年後はどうか。伸び続けるか？ 園芸のプロが現場に立っていません。園芸文化はどうか？

生産者も消費者が喜ぶものを作る事でしょう。多様な商品形態が生まれてきます。感性豊かな若い人がどういう事を考えているか、現場の生の声を聞きたいと考えて、演者を選定しました。

地方都市に輝く園芸店の戦略と実践録

～品揃えが店の個性を磨き、サービスが信頼と信用を築く～

有限会社グリーンハウズベル 代表取締役社長 鐘ヶ江奉一氏

行橋市と小倉市に店舗を構え、オープン当初750坪が1500坪に拡大しました。年中無休、社員・パート15名で顧客は伸び続けています。



鐘ヶ江氏は若く、感性が高く、決断力に富み、顧客、植物への研究心があります。よって用意されたパワーポイントは多く、講演は持ち時間で足りず、クライマックスは総合討論の前に再登場いただく、2部構成となりました。

市場仕入れの機能を極力使い、精力を売り場対応につき込みます。また生産者対応に勤め、見本鉢の依頼先確保、生産者からの事前提案、250株×4回などボリュームを決定、展示一日目の顧客の動きを見て、在庫があっても次を発注と、すばやい対応をしています。

ブルーサルビア、ニューサイラン、ヒューケラ、シバザクラ、モッコウバラ、アジサイ・アナベル、スモークツリー、マンデビラ、栄養系アゲラタム、栄養系トレンシア、オーナメンタルグラス、シュラブ、セダム、ケール、ヒメイワダレソウ、バイカウツギ、クリスマスローズ、セラスチューム、他。植物名と画像が多々繰り返されます。

これらのイメージを顧客に伝えるため、サンプルガーデン、見本鉢は当然で、ポップに修景を必ず入れます。

オープンガーデンクラブも2年前から立ち上げ、好評。店では演出できない部分をやってもらえるのです。会員の庭のそばで苗を販売。実は消費者目線では、店

舗で見ると、植物がそれと違って見えるのです。

量販店との関係は、共に協力していくことです。量販の販売力を利用し、商品を安価で高品質に生産してもらうのです。リスク分散です。また住み分けもいい、混合植えは量販に、色別をベルで扱うなど。

現状、景気の影響で先は不透明ですが、十分先の伸びしろはあると考えています。常に前向きな鐘ヶ江氏です。

関西園芸業界から見える今後の展望

～売店から生産者・流通関係者へ～

グリーンプラザ山長 代表 長底章夫氏

長底氏は生駒の売店と農場を経営する傍ら、大阪園芸商組合理事長、日本園芸商協会理事など、関西園芸業界の世話役として活躍しています。



2003年以降、お客様の減少は組合員の減少につながり、何でも売れた時代から、何とかして売らなければいけない時代になりました。販売金額に対し、経費がかかり過ぎです。仕入れ100円の商品を250円で売らないと利益が出ない。専門店と量販の品質差は無くなっています。

よって、大阪園芸商組合では、正会員の小売店と、生産賛助会員の生産者、賛助会員の市場共同で「販売企画部」を開設し、生産賛助会員から仕上がった植物を価格安定の元、正会員へ販売しています。市場も挟んでの密な打ち合わせが繰り返されます。売店に生産者の試作情報などが入ります。今年はUチャンネルのテレビ放送に乗せ、大阪、兵庫の消費者にも直接伝えます。

また市場の営業担当が生産者を訪問する際は、小売店も同行する時代になったのかもしれませんが。情報の垣根が取り払われ、業界として改革を目指す関西です。

ネット通販最前線から見える鉢物

～鉢物の中にも魅力的な商品がたくさんあるのに…～

株式会社アーキネット・園芸ネット店長 高橋くみ子

園芸ネットは、実店舗はなくインターネット通販専門店として2000年にオープンしました。当初の取り扱い商品点数は約300点でした。2010年の現在は8000点になります。Yahoo!ショッピングとamazonに支店



を持ちます。客層は会員制で、30～40代が中心。女性6：男性4で男性のほうがマニアックなものを買います。苗物がほと

んどです。

実店舗では見栄えがよく、大量、人気品種中心ですが、ネットでは半商品がよく、ロングテールの品目になります。新品種、掘り起こし品、限定販売品など。マイナー商品も販売可能です。

情報の正確さは大事で、来歴、性質、育て方、画像などです。毎日数十点上げ、数十点下げています。細かい仕事の積み重ねなのです。

出店したい方は、最初はモールから始めればよいのではないのでしょうか。スタッフ1名でできます。その売り上げで人件費が出ればまず大丈夫です、とのアナウンスがありました。

また生産者の方で、何か面白いもの、発掘品などあれば、中途半端でもよいものであれば、ご提案くださいと呼びかけられました。

地域で輝くお店を目指して

～「小売としてできることはまだまだある」と語る社長～

株式会社 花佳 代表取締役 薄木健友氏

札幌の生花店フロールン花佳を経営。Club Doのキャプテンとして勉強会や生産者との交流会などを行い、切花の水揚げと鮮度管理に関する講演や雑誌連載など活動は多岐にわたります。



卒業後は家業の家電販売店に就職しましたが、時代の節目で、量販店中心になり、注文をとってメーカーの倉庫にあっても送ってもらえない状況があったのです。自己責任でない部分に苦しみ、花の業界に転進しました。

最初に感じたのは、「成熟していない花業界に疑問」であったそうです。水揚げや切花の管理のしかたが確立していない、産地情報が少ない、新品種情報が遅かったり分からなかったりなどです。そして今もそのま

です。

7年前から生産者・産地表示をしています。顧客のPOS管理で客を名前で呼ぶことができるのです。家電業界に居たときの接客です。

量販店重視の流れは止まりません。過去の家電業界と類似します。大量だから安い。市場は高くすることが仕事では？ 流通物の単一化は生け花花材が手に入らない。日本の花文化はヨーロッパとは違うはずです。

花店は街に必要なお店です。お客様の期待を裏切らないためにも努力します。日持ちだけの考え方はだめです。

総合討論二日目

コーディネーター：福永哲也

演者：鐘ヶ江奉一氏、長底章夫氏

高橋くみ子氏、薄木健友氏

今まで接点の薄かったネット販売への質問が多く出ました。売り上げベスト3はバラ大苗、クリスマスローズの育種家のもの、クレマチスです。ネット販売と実店舗売り上げの時期の違いは、5月とその前の4月が多く、落ち込むのは8月と1月です。掘り起こし品の見つけ方は、大々的に宣伝されて、翌年、翌々年に宣伝のないものなど。ナーセリーの畑にあり、殖やしたりしています。

購入年代と生産者の協力について、長底氏は、40～50代の来店が多く、その娘さんは20代。色は娘が選ぶ。20代単独の呼び込みは難しいそうです。生産者の協力は必要です。高橋氏は、事務所が渋谷にあり、20代女性が服を買う町。かわいい、若い子のセンス、小物に対する感覚。園芸的なかわいいブームを作ったらよいのではないかと提案。

野菜苗、花育、環境産業として、花の香りなど話題は多岐にわたりました。

参加者からは「明日、いや今日からやるのが見つかりました」「西の地域のお店に何を、どのレベルを仕掛ければいいのか解りました」などの声が寄せられ、得るものが多々あったセミナーとなりました。

◎テキスト購入ご希望の方は、代金2000円（送料込）を添えて、下記へお申し込みください。

〒271-8510 松戸市松戸648

千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内「花葉会」事務局

TEL:047-308-8810 郵貯銀行振替：東京5-1334 花葉会

◎第28回2011年花葉サマーセミナーの開催予定

日時 平成23年6月25日（土）・26日（日）

会場 千葉大学けやき会館（JR西千葉下車）

思いが広がる「1000 属検定」

千葉大学 園芸学部園芸別科花卉専攻

後 閑 早 苗

のんびりと年齢相応に学生生活を過ごしていたころに比べて、年を重ねた現在の方が充実しているし、学習量も多いような気がしています。特に花産業必修の1000属検定については、目標を掲げて日々格闘。

検定は1986年9月から実施され現在に至っていますが、C級ライセンスは花産業では常識レベル、B級ライセンスは社会に出ても同年代にまず競争相手はいない、A級ライセンスともなれば花卉産業の頭脳として脚光をあびるでしょう…とされています。

高校生の時から華道を続けている私にとっては、植物を見れば大抵の名はわかりますが、その植物の属名(しかもラテン語)・科名となると、わからないことがばかりです。ブーゲンビレアがオシロイバナ科? アサガオ・ヒルガオ・ヨルガオがみんなヒルガオ科? なぜ??? 覚えようとしても頭の中には「?」がどんどん増える一方です。属名のラテン語もまた英語を習い始めた中学生のようにスペル間違いが多い。子供達には今まで「スペルは何度も書いて覚えるのよ」と言っていた手前、私がやらないわけにはいきません。見えるところでわざとらしく勉強をしたこともあって無事にC級は合格しました。

1000属を学んでいく上で、ただ単に属名や科名を暗記するのではなく、その植物の名や姿に思いを向けてみる。するとそこから広がるいろいろな世界が見えてきます。冠婚葬祭に使われる植物の由来、日本の色を表すために使われる植物の多さ、万葉集に歌われた植物など。ただし、私は思いを広げる時間が長すぎて合格までにちょっと時間がかかってしまいましたが。

覚えたことを忘れないためにも、日頃の灌水当番の時には鉢ごとに丁寧に水やりをします。鉢に挿して

あるラベルと植物を見ながら季節の違いによる植物の変化も観察します。自分の食事は忘れても灌水は絶対に忘れてはなりません。今年の夏は猛暑・酷暑が続き例年以上に灌水が大変ですが、動くことの出来ない植物のために全員交代で灌水をしています。

園芸別科花卉専攻は「花組」と呼ばれています。優しい響きです。2年という短い期間に花卉産業のプロになるべく勉強と実習に真剣に取り組み、花卉生産者としての自立を目指しています。高校卒業後の進路や既に社会人を経験してからでも遅くはありません。実際に花組の同級生は私の息子と同学年なので母子の年齢差です。園芸学部の専門科目を受講でき、園芸別科生専用の授業もあるので花卉産業の理論と実務を確実に習得することが出来ます。

秋に開催される戸定祭には、実習で育てたパンジー・ビオラや花組の先輩方が生産している鉢花の販売と綿菓子販売をしました。毎年先輩方の力をかりて花組の売店は盛況です。今年も話し合いから始まり、開催に向けて計画を立て、先生や苗生産部の技術職員の方々に教えていただきながら準備を進めています。今の花組のカラーを出し明るく元気な花屋さんになることでしよう。

2年生は修了論文の研究も進むなか、それぞれが自分のレベルでの1000属検定合格に向けて取り組んでいます。私はこれからもしっかりと1000属の植物に思いを広げてしまうので時間がかかってしまうと思いますが、目標を一段ずつ上っていきます。そして頭の中には「?」が相当増えるはず。そのあとは一つずつ「?」を減らしていくために次の勉強です。いつになるのでしょうか…。



花産業必修 1000 属検定試験の様子 (千葉大学園芸学部)



出荷目のパンジー・ビオラ (千葉大学環境健康フィールド科学センター)

花葉会総会

平成22年10月17日(日)午後2時より、平成21年度・平成22年前期花葉会総会が、千葉大学園芸学部松戸キャンパスE棟2階合同講義室にて開催されました。出席者43名、宮田増美幹事の司会進行で定刻通り開始。

安藤敏夫会長より、開会の挨拶と大学の近況報告がありました。「まず、飯塚宗夫元教授(平成22年4月)、および花葉会会計監査の村川文彦監事(平成22年8月)の訃報をお知らせし、哀悼の意を表します。なお、昨年は千葉大学園芸学部の移転問題が終結し、100周年記念事業が行われるなど激動の年でした。しかし今年は平穩無事です。さて、サマーセミナーでも、花産業を環境を整える産業として捉え、花産業を拡大しようと活動しています。さらに前進するためには法律的なバックアップが必要です。今年4月、山下ようこ都議会議員が一般質問に立ち、環境問題として屋上緑化はすでに条例化されているが、オフィスビルの室内の緑化についてどう考えているかと質問。緑の役割は多様かつ重要であると認識していると回答がありました。花産業の発展のためにも、東京都から条例化を

ぜひ実現させたいものです」。

午前中に開催された幹事会で推薦を受けた長岡求幹事長が議長に指名され、議事に入りました。なお、平成21年総会議題にて決定のとおり、9月を事業開始月に変更したことから、平成22年前期を平成22年4月～8月としたとの報告がありました。

平成21年度事業報告

(平成21年4月～平成22年3月)

- ① 7月18・19日
第26回花葉サマーセミナー
- ② 10月10日 総会
- ③ 花葉会賞の贈呈
21年度の受賞者は、篠田朗彦氏(昭和37年造園学科卒)、西川勲氏(昭和38年農業別科修了)、今西弘子氏(昭38年総合農学科卒)の3名であった。
- ④ 11月25日～30日第19回台湾への海外園芸事情調査。
- ⑤ 12月10日「花葉」28号発行
- ⑥ 花産業必携1000属検定
- ⑦ 幹事会の開催は、平成21年4月25日、6月20日、7月19日、8月29日、10月10日、11月21日、12月19日、平成22年1月30日、2月21日の9回。

平成21年度会計報告

収入の部

前年度繰越金	1,230,071
会報広告料(28号分)	978,950
サマーセミナーテキスト売上	91,720
書籍売上	8,500
卸用カタログ売上	27,250
協力金	371,310
セミナー収入	0
基金より繰入	2,000,000
基金より繰入(次年度セミナー会場費)	0
基金より繰入(セミナー補填分)	1,227,157
雑収入	57,483
預金利息	262
過誤入金	27,000
合計	6,019,703円

支出の部

印刷費	20,475
会報関係	1,327,310
通信費	84,990
運送費	7,320
記念品代	132,300
会議費	364,707
事務費	445,092
賃金	378,150
慶弔費	21,000
税金	65,431
過誤入金戻入	27,000
セミナーへの補填	1,227,157
日本花普及センター賛助金	100,000
柏の葉キャンパス桜苗木代	115,200
次年度分セミナー会場費	0
合計	4,316,132円
差引残高	1,703,571円

第26回

2009年花葉サマーセミナー会計

平成21年7月18・19日、(助)全電通労働会館 全電通ホールにて



総会会場

開催。参加者数 210 名（うち幹事、講師、記者、発表者、学生等関係者計 84 名）

収入

受講料		
@ 30,000 × 91 名	2,730,000	
その他割引 35 名	933,000	
合計 126 名	3,663,000 円	

支出

会場費	2,412,613
印刷費	869,000
講師謝礼	600,000
講師旅費宿泊費	390,150
通信費	22,810
運送費	216,240
事務費	249,521
会議費	4,361
広告費	58,800
税金	66,662
雑費	66,666
合計	4,890,157 円
差引	-1,227,157 円

基金報告

(平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月)	
前年度残高	24,324,630
きよ金	0
定期利息	55,480
普通利息	425
前年度会場費戻入	582,750
セミナー補填 △	1,227,157
次年度セミナー会場費	0
一般会計へ繰入れ	
△	2,000,000
合計	21,736,128 円
(平成 22 年 3 月 31 日現在)	

平成 22 年前期事業報告

(平成 22 年 4 月～8 月)

- ① 6 月 26・27 日 第 27 回花葉サマーセミナー
 ② 幹事会は平成 22 年 5 月 29 日、6 月 27 日、8 月 8 日の 3 回行われた。

平成 22 年前期会計報告

収入の部

(平成 22 年 8 月 31 日現在)	
前年度繰越金	1,703,571
会報広告料 (29 号)	0
サマーセミナーテキスト売上	32,000
卸用カタログ売上	11,500
協力金	24,520
セミナー収入	420,896
基金より繰入	0
基金より繰入 (セミナー補填分)	0
雑収入	44,486
預金利息	266
合計	2,237,239 円

支出の部

印刷費	40,950
会報関係	4,140
通信費	2,730
運送費	0
記念品代	0
会議費	43,505
事務費	35,785
賃金	211,885
慶弔費	60,900
税金	66,488
セミナーへの補填	0
日本花普及センター賛助金	100,000
合計	566,383 円
差引残高	1,670,856 円

第 27 回

2010 年花葉サマーセミナー会計

平成 22 年 6 月 26・27 日 千葉大学けやき会館にて開催。参加者数 253 名（うち幹事、講師、記者、発表者、学生等関係者計 86 名）

収入

受講料		
20,000 × 133 名	2,660,000	
その他割引分 34 名	612,000	
合計 167 名	3,272,000 円	

支出

会場費	915,500
印刷費	573,300
講師謝礼	400,000
講師旅費	391,660
通信費	12,200
運送費	229,600
事務費	280,520
会議費	3,880
税金	44,444
合計	2,851,104 円
差引	420,896 円

基金報告

(平成 22 年 4 月～平成 22 年 8 月)	
前年度残高	21,736,128
定期利息	0
普通利息	240
セミナー補填	0
一般会計へ繰入れ	0
合計	21,736,368 円

会計監査報告

監事の河野寛司氏より、「平成 21 年度、および平成 22 年前期の会計収支の監査の結果、事務処理および諸帳簿の記載は正確かつ適正に行われていたことを報告しま

す」と、報告がありました。

平成 22 年度事業計画

(平成 22 年 9 月 1 日～平成 23 年 8 月 31 日)

① 第 28 回 2011 年花葉サマーセミナー開催

平成 23 年 6 月 25・26 日(土)(日)

会場：千葉大学けやき会館

懇親会会場：千葉大学食堂

② 「花葉」29 号 発行

③ 花産業必修 1000 属検定

④ 第 21 回海外園芸事情調査

平成 22 年 9 月 22 日～9 月 29 日

「メキシコ」

⑤ 花葉会賞の贈呈

平成 22 年度予算

収入の部

前年度繰越金	1,674,996
会報広告料(29号分)	1,055,000
サマーセミナーテキスト売上	50,000
その他の収入	264,704
基金より振り入れ	0
預金利息	300
合計	3,045,000 円

支出の部

印刷費	110,000
会報関係	1,400,000
通信費	100,000
運送費	5,000
記念品代	150,000
会議費	300,000
事務費	260,000
賃金	500,000
慶弔費	50,000
税金	70,000
雑費	100,000
合計	3,045,000 円

会計監査役の選任

新会計監査役 篠田 朗彦 氏
(村川 文彦 氏のご逝去に伴う)

なお、以上の議題は、拍手をもって承認されました。

花葉会賞贈呈

総会に引き続いて、花葉会賞の贈呈がありました。長岡求幹事長より、野原宏氏(昭和 39 年園芸学科卒)、安藤正彦氏(昭和 40 年園芸学科卒)、市川恵一氏(昭和 40 年園芸学科卒)の 3 名を紹介。安藤会長より賞状と記念品が授与されました。

受賞者を代表して市川恵一氏より、挨拶がありました。

受賞記念講演

安藤正彦氏より、「世界のガーデンセンターから学ぶ園芸の現状」と題して、講演が行われました。

学内散策

午後 4 時より 30 分ほど、安藤敏夫会長の案内で温室、鈴木邦彦幹事の案内で 100 周年記念事業関連の 2 グループに分かれ、学内散策が行われました。

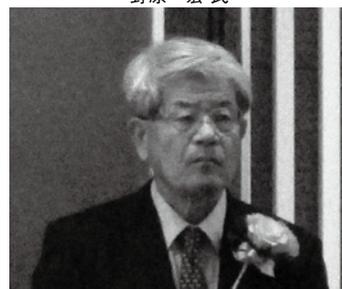
懇親会

午後 4 時 30 分より、緑風会館 2 階にて、武内嘉一郎幹事、鈴木邦彦幹事の司会進行で懇親会が始まりました。

乾杯の発声を小田善一郎氏が行いました。途中、都議会議員の山



野原 宏氏



安藤 正彦氏



市川 恵一氏

下ようこ幹事の挨拶、若手の石黒伸生氏、西山絵梨香氏の近況報告、学生の就職活動などもあり、終始和やかな雰囲気、盛会のうちに終了しました。

(文責：編集部)

花葉会会則 (2010/10/17)

<名 称>

第一条 この会は「花葉会」という。

<事務局>

第二条 この会の事務局を千葉大学園芸学部生物生産科学科花卉園芸学研究室におく。

<会 員>

第三条 本会の会員は、千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室並びに附属農場花卉部に在席した者、及び戸定会員で現在花卉関連業務に携わる者、
(2) 内地留学生、研究生、聴講生、その他本会の主旨に賛同し、総会の承認を得て所定の手続きを終えた者とする。

<目 的>

第四条 この会は会員相互の親睦、研さんと情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とする。

<事 業>

第五条 この会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

①総会 ②親睦会 ③研究会 ④会報、名簿等の発行 ⑤功労者の表彰 ⑥その他、前条の目的を達成するために必要な事業。

<役員等>

第六条 この会に次の役員をおく。

①会長1名 ②副会長 若干名
③幹事長1名 ④副幹事長3名
⑤年次代表幹事 若干名 ⑥幹事50名以内 ⑦会計監査2名
(2) この会に名誉会長をおくことができる。
(3) この会に顧問、相談役を若干名おくことができる。

<役員等の選出と役目>

第七条 会長は総会の総意により推戴し、会務を総括し、会を代表する。

(2) 副会長は総会の総意により推戴し、会長を補佐し、会務を処理

する。

(3) 幹事長は幹事の互選により選任し、幹事会を主催し、会を代表して会務を処理する。

(4) 副幹事長は幹事の互選により選任し、幹事長を補佐し、会務を処理する。

(5) 年次代表幹事は幹事の互選により選任し、世代の意見を集約し、会の運営に寄与する。

(6) 幹事は会員の中から互選する。

(7) 幹事は幹事会を組織し、議事を審議決定し、会の事業を執行する。

(8) 会計監査は会員の推薦により会長が選任する。

(9) 会計監査は会の会計を監査する。

(10) 名誉会長は会員の中から総会において推戴する。

(11) 顧問、相談役は会員の中から幹事会の協議を経て会長が委嘱する。

<役員任期>

第八条 役員任期は2年とし、再選を妨げない。

<会 計>

第九条 この会の経費は会費、寄付金、収益金をもってあてる。

(2) 本会の収支予算及び決算は幹事会の議決と会長の承認により定められ、決算は会計監査の監査を受けなければならない。

(3) 会計年度は毎年9月1日より翌年8月31日までとする。

(4) 会費は必要に応じ幹事会の議決と会長の承認により徴収する。

<会 議>

第十条 総会は年1回とし、会長が召集する。

(2) 幹事会は必要に応じ、会長が召集し、会務事項について審議する。

(3) 総会の議事は出席会員の2/3以上の賛成がなければ議決できない。

<会則の変更>

第十一条 この会則は総会の議決を得なければ変更できない。

<その他>

この会の細則については、幹事会にはかり、会長が決定する。

<附 則>

この会則は昭和56年9月6日から実施する。

この会則は平成9年10月26日から実施する。

この会則は平成10年10月17日から実施する。

この会則は平成13年9月29日から実施する。

この会則は、平成15年9月27日より施行する。

この会則は、平成16年10月1日より施行する。

この会則は、平成21年10月10日から実施する。

花葉会 役員 (2010/10/17)

顧 問 :

相談役 : 岩井英明、魚舩詔一、
小田善一郎、鶴島久男

会計監査: 河野幹司、篠田朗彦

名誉会長: 横井政人

会 長 : 安藤敏夫

副会長 : 國分 尚、渡辺 均

幹事長 : 長岡 求

副幹事長: 田中桃三、望田明利、
武内嘉一郎

年次代表幹事: 田中桃三、
望田明利、武内嘉一郎、
小笠原 誓、渡辺 均
(年次順)

企画編集幹事: 石川君子、
小泉 力、鈴木 司、
田旗裕也、松原紀嘉、
宮田増美、村井千里、
山口まり、山田幸子、

庶務会計幹事: 上田善弘、
小沢 勇、西原彩子、
野本寿久、福永哲也

事業基金募集幹事: 熱田 健、
猪熊 雅雄、大林修一、
小笠原 誓、小黒 晃、
久保田芳久、齋藤俊一、
荘 智裕、鈴木邦彦、
富山昌克、山下容子

(五十音順)

◆ 花葉会賞受賞者紹介

地域花卉振興へ貢献

野原種苗株式会社 代表取締役 社長 野原 宏 氏

昭和 39 年 3 月千葉大学園芸学部園芸学科卒業後、(財)日本園芸生産研究所に入所し、主にアムスメロンの育成に関与。昭和 47 年、お父さんの経営するキュウリの「大利根」で知られた野原種苗(株)に入社。メロン「アムス」の普及に努め、一時は全国第 2 位の栽培面積の作付にまで拡大させた。

昭和 47 年、農場の拡張に伴い、本社は屋前の施設を改造し、ガーデンセンター（室内売り場面積 120 坪



ほか露地)を開設した。野菜種苗の販売には季節性が強く、年間通しての収入の平準化に着目してのことで

菊展や研修などに提供できる準備室 あった。久喜駅より 1.7km という地点にあることから、生産者のための資材にあわせ、家庭用の絵袋種子、野菜や花苗、果樹や植木苗、山野草、古典植物、サボテン多肉植物の苗から鉢物、贈答用鉢物と、多方面にわたる品揃えを売り物にした。

また、市内はもちろん、近隣の各種団体の園芸研修のための材料揃えと社員講師の派遣など、地域に密着したサービスで知名度を高めていった。施設の拡大により寄せ植えなどの作業場が整備され、それを久喜愛菊会の定期展示会場（約 1 ヶ月間）や各種団体の実習場にも提供されている。とくに久喜愛菊会は 30 年以上にも及んでいる。

昭和 61 年より代表取締役社長となり、経営の主体を『特色ある新品種の育成とその普及により、日本農業に貢献すること』という理念に基づいて品種改良を柱にしている。

日本種苗協会の品種コンクールにおいて、ネギ「夏焰」（平成 7 年）、コマツナ「きよみ」（平成 9 年）、ホウレンソウ「アクセス」（平成 12 年）で農林大臣賞を受賞。

一方、ビバホーム、カインズ、D 2、カンセキ、ジョイフル本田の出店が相次いだり、地道な地域活動と、ホームセンターにない種類や品種、利用型の飾りつけ陳列、小苗から大株までと工夫し、いろいろな需要に対応して顧客をつかんで、現在も 1000 坪の売り場面積



広々とした観葉植物売場



催事に因む商品の飾りつけをした鉢物売場

をもつガーデンセンターを営んでいる。

さらに、埼玉県東部の地方紙に協力して「お庭拝見」に賞を出し、庭自慢の方を積極的に参加させたり、月 2 回「野原園芸だより」でタイムリーな作業の手ほどきを連載して、250 回に達している。

加えて、高等学校の生徒の職場体験研修を毎回 5 人ずつ受け入れている。また、ウコン栽培の産業化、オリーブ品種の収集と普及、ブラックピートの導入などの功績がある。

その他の略歴は以下のとおり。

(財)日本種苗協会関係
昭和 63 年～平成 12 年 理事
平成 4～12 年 技術研究部会長
平成 12～20 年 常務理事
平成 16 年～ 政策委員長
平成 20 年～ 専務理事
農林水産省関係
平成 13 年～ (独) 農業生物資源ジンバンク事業評価委員
平成 17 年～ 農業資材審議委員
平成 20 年～ (独) 農業食品産業技術総合研究機構 野菜茶業研究所運営委員

(文責：村井千里)

□ 花葉会賞受賞者紹介

デザイナーを魅了したバラを… バラ切り花生産に人生をかけて

有限会社 市川バラ園 社長 市川 恵一 氏

経歴

昭和 17 年 7 月 静岡県三島市に生まれる
昭和 36 年 3 月 静岡県立韮山高校卒業
昭和 40 年 3 月 千葉大学園芸学部園芸学科卒業
昭和 47 年から 静岡県農業経営士
担い手育成・試験研究とのタイアップ

著書

『ROSE ON TIME』(草土出版、2007 年)
また『花時間』『フローリスト』『ベストフラワーアレンジメント』『フラワーショップ』『家庭画報』『ミセス』などの雑誌に掲載される。
最近のイベント参加

2003～ 西武ドームの国際バラとガーデニングショー 展示・トークショー
2007 5人の薔薇取人展 南青山 展示・トークショー
2007 メリディアンカップフラワーモード大賞 展示
2008 ベストフラワーアレンジメント トークショー
2009 丸の内フラワーウィークス 展示
2010 フラワーアート アワード 六本木 展示

バラの生産者といっても、ガーデンローズを中心とした苗木生産者から、切り花バラを大規模に生産している切り花生産者、ミニチュアローズの鉢物生産者、そして新しい品種を育成している種苗会社まで、その経営内容はいろいろである。

市川氏は西武ドームで2003年から始まった「国際バラとガーデニングショー」に毎年展示しているが、その独特な表情をもったオリジナル品種がフラワーデザイナーや家庭の主婦たちにも絶大な人気を博し、話題を提供してきた。

市川氏は1965年3月に千葉大学園芸学部園芸学科(花卉園芸専攻)を卒業し、すぐに切り花バラの生産を始めた。当時、水田地帯で花卉生産をする人は、耕作面積の狭い農家か、あとは道楽でやっているか程度であったという。父親は稲作中心に野菜生産などを手広くやっていたが、彼は「これからはコメでは食っていけない」と判断し、以前から興味があったバラ栽培に挑戦することにした。

まずは農業後継者資金で50万円の融資を受け、500㎡のビニールハウスを建て、独学でバラの生産技術を習得していった。1971年には農水省の総合資金で600万円の融資を受けてアルミ温室を建て、その後も順次規模拡大を図っていった。

1975年には施設面積5,000㎡となり、市場で人気の高い品種を中心に、高品質バラの安定生産を確立するようになった。1976年には日比谷花壇へ全量出荷という契約を取り、経営的にも安定してきたが、最先端の情報を共有できたことは、後のバラ生産に多大な影響を与えることになった。

彼はこの頃から育種の真似ごとを始めるようになった。「切り花バラはロザリアンから見ると格下に見られ、その悔しさとバラの奥深さを少しでも知ってもらおうと思った」ことが育種のきっかけであったという。

1970年代のバブル期には、マンション等の洋風住宅が多くなってきたことも相まって、「フラワーデザイン」が



左から：アンダルシア（1997年発表 花色は赤。花弁にウエイブがかかった一重咲きのスプレー咲き）イブ・ミオラ（2003年発表 花色はピンク。花弁の多いカップ咲き。オールドローズタイプ）ジャルダン・パフューメ（2008年発表 オールドローズタイプで香りのよい花。ワインレッド系、ベージュ、ピンクなど、いくつかの花色を持つ品種群の名称）

隆盛となり、花のデザインも和風の生け花からフラワーデザインへと移って行ったが、そんな中で花の使い手がどんな花を求めているのを感じることができ、育種の目標が決まった。

交雑育種をする場合、まず育種目標に沿って親を決めていかなければならないが、その後の選抜の段階で、どんな花を残していくかが大切な作業となる。

バラの切り花品種の誕生は、選抜に選抜を重ねて多くの人に認められるような花型・花色を・・・ということになり、競争に勝った有名品種が市場を通して世に出回るが、それを仕事花として扱う業者にとって使いやすいとしても、どこでも同じような花になってしまうという傾向にある。

彼は選抜の段階で花を丹念に観察し、自分なりによい花だと感じ取ったものを残していった。悪い因子があったら捨ててしまうのではなく、良いところのあるもの(個性のあるもの)はたとえ生産性が悪かったとしても、それは技術面でカバーしていけばよいと考えた。

1990年頃からバブルが弾けて、出荷先からの仕入れの見直しがあり、全量だった出荷が50～60%にされ、再び市場出荷を始めたが、新参者にはなかなか値がつかない。それなら自分の品種を作っていこうという方向が強まっていった。

1991年、ティータイムを発表したが、切り花バラの固定観念を覆した姿・形のバラがデザイナー達に好まれて話題となった。その後もデザイナー達にとって使いたい、使いやすい花を目指し、以来、アンダルシア、ルナロッサなど、今までの切り花バラにはないタイプのバラを作りだしていった。

2000年以降はオールドローズ咲き、カップ咲きのバラ、香りのよいバラを作出し、業界やデザイナーの注目を浴びるようになった。

彼のバラへの思いは「風にそよぐばら、風に香る薔薇、心なごむバラ」だという。これは切り花バラとガーデンローズの融合とあってよいだろう。

現在の経営規模は施設面積1万㎡。法人化しており、社員4名、パート6名。これまでに作出した品種は30品種以上、その多くはパテントを取得している。

(文責：宮田増美)

◆ 花葉会賞受賞者紹介

「自然を感じる生活」をモットーに ガーデンセンターの経営 38 年

有限会社 長良園芸 会長 安藤 正彦 氏

経歴

昭和 17 年 7 月 岐阜市に生まれる
昭和 36 年 3 月 岐阜県立長良高校卒業
昭和 40 年 3 月 千葉大学園芸学部園芸学科卒業
昭和 40 年 4 月 福花園種苗株式会社入社
昭和 47 年 3 月 福花園種苗株式会社退社
昭和 47 年 11 月 長良園芸設立
平成 19 年 9 月 (有)長良園芸社長を長男に譲り会長となる

著書

『原色鉢花写真集』(誠文堂新光社:共著、1995)
『新しい鉢花』(誠文堂新光社、1999)
『おすすめガーデンプランツⅠ』(グリーン情報、2007)
『おすすめガーデンプランツⅡ』(グリーン情報、2008)

この原稿をまとめるにあたって、送られてきた資料が入った封筒には「自然を感じる生活」というキャッチコピーが刷り込まれていた。これは長良園芸が「室内には鉢花や観葉植物があり、屋外では自分でタネを播き球根を植え、さらにバラやクレマチスを育てる生活が真に豊かな生活である」という“フィール ザ ネイチャー”を基本理念に、園芸だけにこだわらないライフスタイルを提案してきているためである。Feel the Nature というコピーはヨーロッパでは鉢花等のタグによく使われているという。

安藤正彦氏は昭和 40 年 3 月に千葉大学園芸学部園芸学科(花卉園芸専攻)を卒業後、福花園種苗株式会社に入社。ここでは一年草の固定種(アスター、ストック、パンジー、ダイアンサスなど)の採種等に携わっていた。

自宅はシクラメンを中心とした鉢花生産農家であったが、敷地内を環状線が通ることになり、用地の多くが買収されたことを機に勤めを辞めて、昭和 47 年小売店を始めた。

設立当初は庭園樹を中心に、盆栽、サツキ、山野草の需要があり、それに応えていたが、50 年代に入っからは“ガーデンセンター”を自認するようになった。季節の花苗を中心に、宿根草類、バラ、クレマチス、ツバキ、クリスマスローズ等の特集を企画。店内では鉢花、洋ラン、観葉植物を個性的な鉢カバーに入れたり、寄せ鉢にしたり、水耕栽培品なども展示販売。外売場にはハンギングバスケットや寄せ植えなどを展示。お値段は少々高くても高品質のものを…ということにこだわってきた。

最近では切り花やプリザーブドフラワーのコーナーを設置したり、各種雑貨類や新鮮な飛騨産の野菜なども販売。また、エクステリアの設計・施工部門も併設するなど、顧客の需要に対応している。

現在、日本園芸商協会の副会長という立場にあるが、同協会には 1985 年の設立当初から参画し、また業界の各種団体に加盟して情報交換と研鑽を積み、海外へも



エンジュをシンボルツリーにした外売場(左上)、店舗の周りにはボーダーガーデン(左下)、店内の鉢花、観葉植物売場(右)

毎年のように出向いて先進地の情報も取り込み、世界的なレベルでのガーデンセンターを目指している。

展示・販売している植物については、その学名や原産地、管理のポイントをパソコンに入力し、そこに値段がつけられている独自のソフトを開発して、そのタグを添付している。このデータの集積が元となって、日本園芸商協会編の『原色鉢花写真集』の編集に参加することになった。

同書の編集後記に「一最近の傾向として植物の名称が商品名化し、正しい植物名がわかりにくくなってきている。そして鉢花としてどのような型に仕立てるのがよいのか、また、家庭環境の中で鉢花をどのような場所に置き、花が終わったどう管理するのか等々、雑誌などで断片的にとらえられてはいるがそれをまとめた書物がないのが意外である。」と記している。安藤氏にとってはこの書籍のまとめが基となって、その後『新しい鉢花』や『おすすめの花プランツ』の執筆に繋がり、現在は自治体や農協、各種団体が主催する「寄せ植え講座」などの依頼を受け、地域で活躍するようになった。

今後も「人類にとってもっとも重要な自然環境の一端を担う仕事であると認識し、同業者、市場とのコミュニケーションを図り、消費拡大に繋がるようなボランティア活動にも参加していきたい」と、その抱負を語ってくれた。

現在の経営規模は、駐車場を含めて敷地 1,000 坪、展示温室を含めた店舗面積は 200 坪。従業員数は社員 5 名、パート 5 名ということだ。(文責:宮田増美)

世界のガーデンセンターから学ぶ園芸の現状

有限会社 長良園芸 会長 安藤正彦氏

国際ガーデンセンター協会について

国際ガーデンセンター協会 IGCA (International Garden Center Association) は、1958年に設立。ヨーロッパを中心に、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、南アフリカが中心メンバーです。そこには、各国の公的に認知されたガーデン関連業種の1団体が加入でき、メンバーの国持ち回りで、世界大会が年1回開催されます。ガーデニング文化や花飾りを世界に広めるためのミッションがあり、異なった文化を持つ国のガーデンセンターを訪問し、交流することにより自国の園芸文化とガーデンセンター経営を考える機会ともなっています。

日本は3年前に日本園芸商協会が加盟しました。第52回大会が、平成22年10月10～15日に京都を主会場として開催されました。初めて東洋への誘致です。

日本のガーデンセンターは規模が小さいので危惧していましたが、東京・名古屋・京都・大阪・淡路と視察する中、盆栽・植木・日本庭園を土台にしたディスプレイ等が成り立っている事が見られ、自分たちの文化を大切にしていることが感じられました。

IGCAの大会に参加して

私は、2003年のスイス大会が初めての参加。その後ニュージーランド、フランス、スペイン、南アフリカと、毎回大会に参加し、それぞれ特徴のあるガーデンセンターをみてきました。

世界のガーデンセンターに共通するものは、以下のとおりと考えます。

①「自然」と「楽しさ」「感動」が基本コンセプトにある。②スケールは巨大(中小の店舗や植物だけを扱っているところは、プランツセンターと呼ばれる)。③日本原産の植物がよく目に付く。④園芸をキーワードにインテリアやエクステリア用品の幅広い品揃えをし、造園の相談と植栽・メンテナンス、エンターテイメント、ブライダル、レストランを併設するなど幅広い内容で集客。ガーデンセンターは植物を売るだけではなく、幅広いものを併設しながらお客様を1日楽しませる場所であること。⑤外売場が広く(一部は透明の屋根付き)、ガーデニングは地植えが基本で、コンテナは大きいものが多い。⑥見本展示やインフォメーションコーナー、園芸教室などを開催して園芸文化を牽引

している。

世界のガーデンセンターの園芸の現状に学ぶこと

①『Feel The Nature』を基本コンセプトに植物を楽しむことが大切。②『最新の園芸品種』と広範囲な種類の展示で目新しさと異空間と非日常をも表現。びっくり・驚く・感動する寄せ植えや庭造りをするのが大切。③『異空間』を庭や寄せ植えで表現。例:海辺、高山、宇宙、熱帯、日本、アフリカ、オセアニアなど。④『何を見せるのか』植物は花以外の見せどころ(葉・幹・実)と用途を把握して品揃えされ、珍品扱いはない。どこを見せたいのかははっきりさせることも大事。

⑤野放しガーデン(ワイルドな宿根草、丈夫な球根類)の考え方。⑥ブランド苗(PW、サントリー)、オランダ産、デンマーク産などは、全世界に浸透している。⑦デザインと華やかさを優先した、植生を無視した室内向きの寄せ植え。⑧NativeとClassic Plantsがコンセプトで、少し前に流行した花や地元の植物を大切に、楽しむ。⑨カラフル(ペイントガーデン)。⑩常設でメジャーな植物(バラ、クレマチス、ギボウシ、蔓性種)はコーナーが設置されている。⑪PerennialとHardyなど、冬を耐える草っぽいものが人気。⑫ポップやサインなどで植物の特性を強調。例:美味しい、食べられる、私はよい香りを出します、健康によい、美容になる、気持ちが暖くなる、中位に生長します、など。⑬一、二年草の比率は少なく、連結ポットか9cmポットでの販売が多い。⑭宿根草や低木類は5号以上のポットでゆとりある状態(根詰まりしていない)で販売。⑮コンセプトに合った植物を組み合わせてトレーに入れてセット販売。⑯洋ラン(胡蝶蘭、オンシジューム)は素材として販売。⑰葉の色や形、テイストの違いを重視。⑱水辺の植物を室内・屋外でコーナーを作り常設販売。⑲フォーマルな「寄せ植え」と「意外性」のある見せ方。

園芸店は、消費者から見た園芸店であって言葉遣いにも注意をしながら販売して欲しいものです。農業の延長ではありません。今後、園芸の世界の中で産官学がかかわりながら研鑽に励み、公共もかかわって改善することで我々の業界も発展することでしょう。

(文責:編集部)

花葉会基金への募金のお願い

花葉会は、会員相互の親睦、研鑽と情報交換を図ると共に、花卉園芸界の発展に寄与することを目的とし、①総会、②親睦会、③研究会、④会報、名簿等の発行、⑤功労者の表彰等の事業を行っています。

おかげさまで、多くの方々からのご支援・ご協力により、上記の事業をどうにか円滑に運営しております。

さて、会報「花葉」創刊号等でおりました花葉会基金は、29年目を迎え、平成22年8月現在、約2170万円となりました。今後、基金管理委員会を設置し、管理運営の基本方針を作り、健全な経営を図る所存です。しかし、昨今の低金利の状況では、花葉会がさらに発展し、花葉会の目的を推進するための事業を展開し、情報の収集・交換などにより後輩の育成を行うには、この花葉会基金の充実をさらに図ることが必須であります。

是非、花葉会の趣旨に賛同していただき、募金をお願いしたいと存じます。ご協力のほどよろしく願います。

なお、ご送金につきましては、通信欄に「花葉会基金」と明記の上、郵便振替：東京5-13341 花葉会をご利用ください。

花葉会幹事一同

お問合せ：「花葉会」事務局

〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内 TEL:047-308-8810

編集後記

◆今年の夏の暑さのひどかったこと！
太陽が出ている間は外出を控えたほどです。もちろん、庭は水やりするだけで、それ以上の意欲はわかず。家庭園芸家の多くの行動パターンだったのではないのでしょうか。◆花の生産・流通等、さまざまな影響があったようです。来年も？ どうぞ平年

並みの気候に戻りますようにと、祈らずにはいられませんが、気候変動に備えて何らかの対策が必要なのかもしれません。◆今号も皆さまから貴重な原稿をいただきましてありがとうございます。編集人として最初の読者となる特権をフルに活用して楽しませていただきました。◆『花葉』は例

年7月に企画案を立て、原稿依頼等しております。『花葉』へのご寄稿等はお早めに、花葉会事務局宛にご連絡ください。◆『花葉』は花葉会ホームページ <http://www.kayoukai.net/> から見るることができます。ご活用ください。

花葉 2010 No.29

平成22年12月10日発行

発行人 安藤敏夫

編集人 山田幸子

発行所 花葉会

〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学園芸学部花卉研究室内

<http://www.kayoukai.net/>

編集 (有)フローラルプランナーズチーム

花 葉 2010 No.29 (通巻30号)

平成二十二年十二月十日発行

編集人 山田幸子
発行人 安藤敏夫

発行所 花葉会

〒271-8510 松戸市松戸六四八番地
千葉大学園芸学部花卉園芸学研究室内
電話〇四七・三〇八・八八一〇